II. 遺跡調査の概要

御山寺（ごさんじ）遺跡

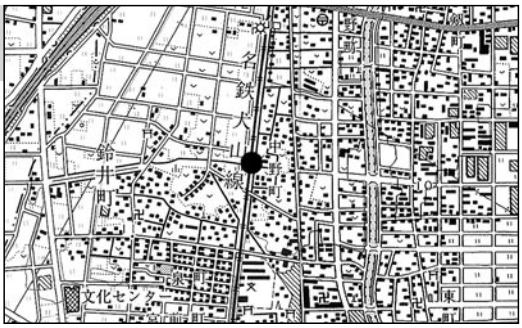
所　在　地　岩倉市中野町
（北緯35度17分18秒 東経136度52分13秒）

調 査 理 由　県道一宮春日井線街路新設改良工事

調 査 期 間　平成16年４月(範囲確認調査)、
６月～９月（本調査）

調 査 面 積　2,580㎡

担　当　者　石黒立人・加藤博紀



調査地点（1/2.5万「一宮・小牧」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、県道一宮春日井線街路新設改良工事の事前調査として、愛知県建設部都市整備課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として、当センターが範囲確認調査と本調査を実施した。範囲確認調査は四月中旬に、本調査は名鉄犬山線を挟んで東西に調査区（西側を04Ａ区、東側を04Ｂ区と呼ぶ）を設けて、平成16年６月から９月までの４ヶ月にわたって実施した。調査面積はあわせて2,580㎡である。

立地と環境　調査区周辺はちょうど、犬山扇状地から沖積平野に移行するあたりに相当し、標高は約11ｍである。明治17年の地籍図では大きく蛇行する旧五条川の痕跡が水田として表記されており、調査区はこの旧五条川が東に強く屈曲する部分の北東に位置している。04Ａ区は表土直下が長さ30cmほどもある大きな円礫を含む礫層であり、これはちょうど扶桑町や江南市の北を流れる現在の木曽川で見つかる円礫に相当する。礫層は04Ａ区の東部で急激に地下にもぐり、04Ｂ区では砂層になる。おそらく、旧地形は西側の旧五条川寄りが高く、東に下降する。04Ａ区西部で古墳時代以後の遺構が大溝以外見つかっていないは、上部の削平によるのであろう。

調査の概要

古墳時代　古墳時代前期に属す竪穴建物跡は、04Ａ区の西部で２軒が隣接して、東部では２軒が重複して見つかった。両者の間には小穴が群集し、窪地に堆積する遺物包含層も認められた。西部の２軒は礫層を掘り込んでつくられている。床面には炭化物がひろがり、壺や甕の破片が出土した。東部の２軒のうち、上部の竪穴建物跡からは壺や甕が砂層中から潰れて出土したので、洪水によって埋没したと考えられる。04Ｂ区では同時期の竪穴建物跡はなく、古墳時代中期の土坑がいくつか検出できたにすぎない。

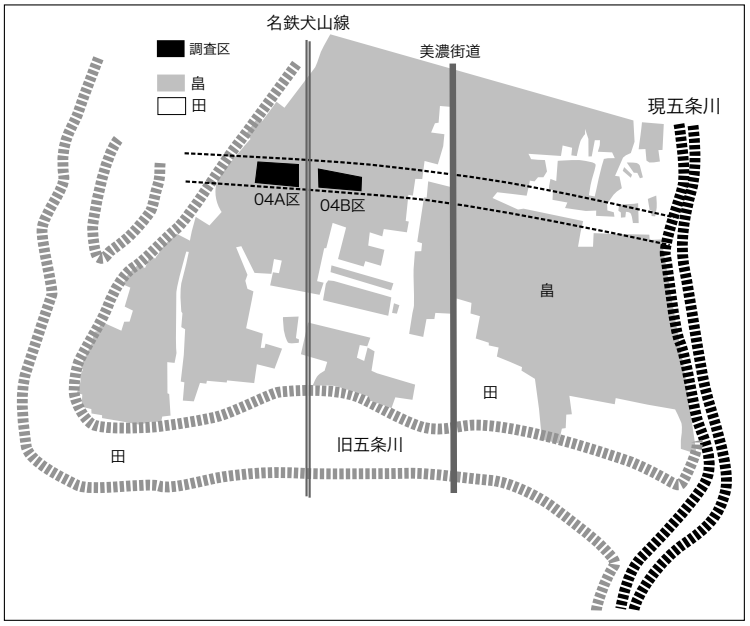


図１　明治17年地籍図による旧地形の復元

奈良・平安時代

竪穴建物跡は04Ｂ区で８軒検出したが、この中にはカマド周辺のみ検出したものを含む。カマドを含めて全形のわかる竪穴建物跡は１軒しかないが、長辺は東西方向の長方形で、カマドは北辺にあり、その北側には煙り出しのトンネル（煙道）も付設されていた。柱穴については判然としない。04Ａ区で見つかった掘立柱建物跡は、柱間は１間×２間で、長辺が南北方向を向く。室町時代の柱穴が付近に多数あるが、穴の形が異なっているために判別できた。柵跡は04Ｂ区西端で見つかった。柱穴が東西方向に並び、その中の一つには平安時代の須恵器片が詰め込まれていた。同じように須恵器片が詰め込まれた柱穴は他に２つあるが、掘立柱建物跡と柵跡のどちらであるかは不明である。このほか多数の土錘とともに焼けた粘土塊が集中して出土した土坑がある。

室町時代後半以後

今回の調査では鎌倉時代の遺物も若干出土したが、遺構は明確ではない。ここでは室町時代以後の遺構のみ取り上げる。04Ａ区では平行する２条の溝と多数の柱穴が検出された。前者は屋敷地周囲の「道」状の空間であり、後者は掘立柱建物群が展開したことを示している。調査区の西側では同時期の遺構は皆無であった。04Ｂ区では、調査区西部で平行、または重複する複数の溝と多数の柱穴を検出し、幅の広い溝を挟んだ東側では多数の土坑を検出した。室町時代後半には多数の柱穴が東西の調査区から見つかったが、残念ながら04Ａ区では柱穴のまとまりは確実には把握できなかった。いっぽう、04Ｂ区では柱穴に川原石が残っているものが多く、柱の基礎となる根石と想定された。調査区の西部では建て替えが確認できる掘立柱建物跡を確認した。

今回の調査でもっとも問題となるのが大溝である。大溝は、04Ａ区では幅約５m、深さ２m弱の規模で、調査区の南辺にそって東西にのびている。04Ｂ区でも調査区南端で東西にのび、調査区東部では重複して幅約７m、深さ２m弱の大溝が再掘削されていた。大溝は最終の埋没時期が17世紀で、上部を洪水層が覆っていた。（石黒立人）



04B区大溝 西から

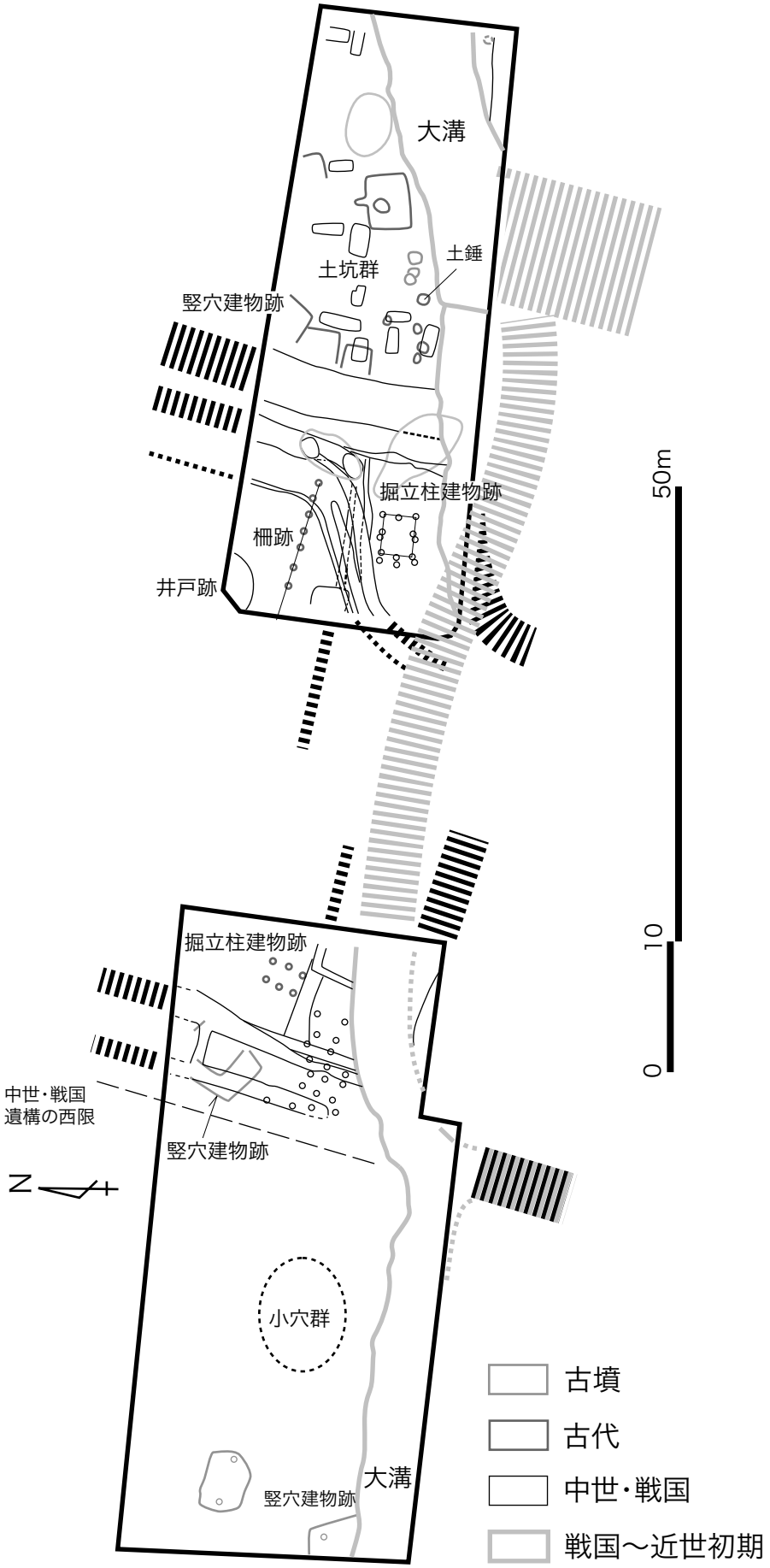


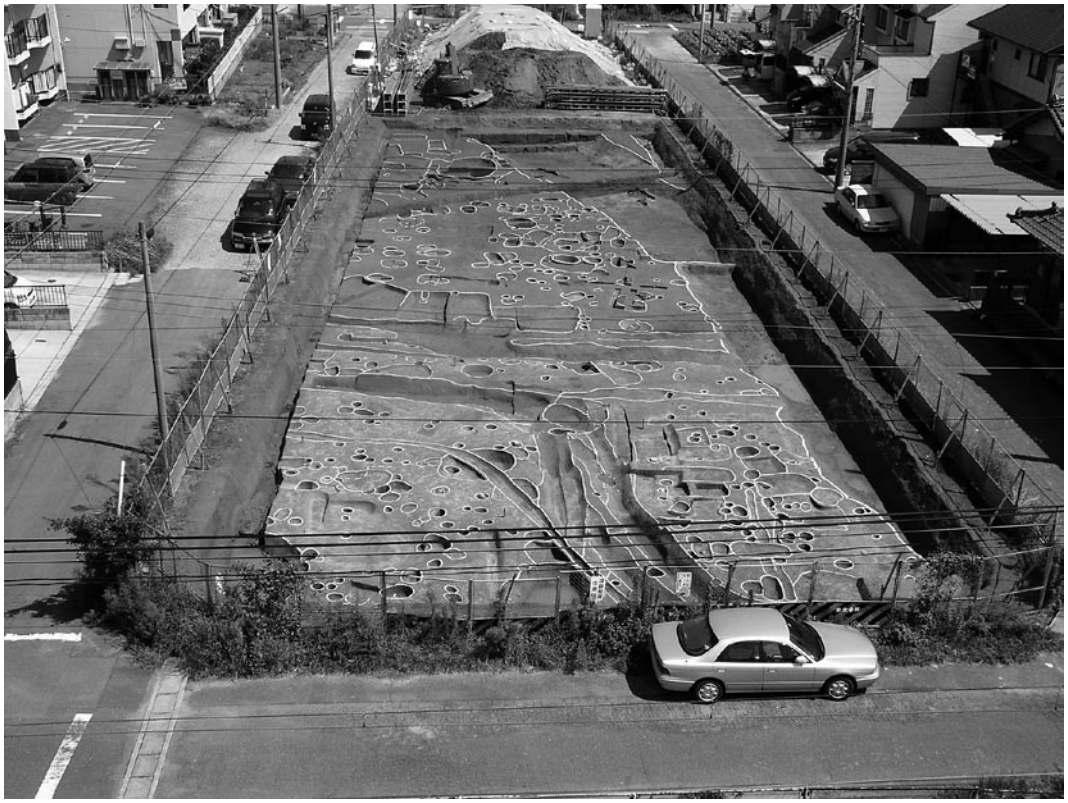
図２　御山寺遺跡遺構配置図



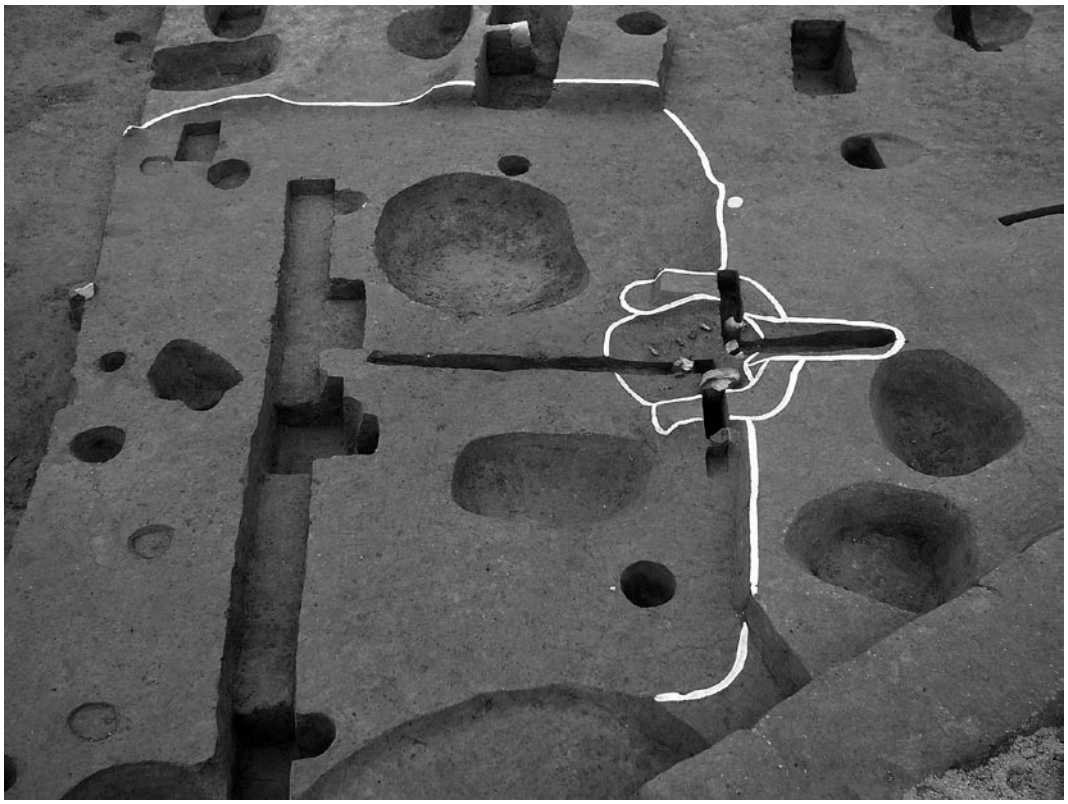
調査区全景　西から　中央が名鉄犬山線



04Ａ区全景　北西から　手前の白い部分が礫層　右上が大溝



04Ｂ区下面全景　西から



古代の竪穴建物跡

朝日（あさひ）遺跡

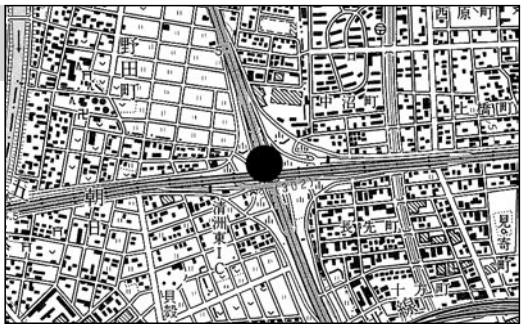
所　在　地　西春日井郡清洲町、春日町、名古屋市西区
（北緯35度13分18秒 東経136度51分18秒）

調 査 理 由　名岐道路

調 査 期 間　平成16年10月～平成17年３月

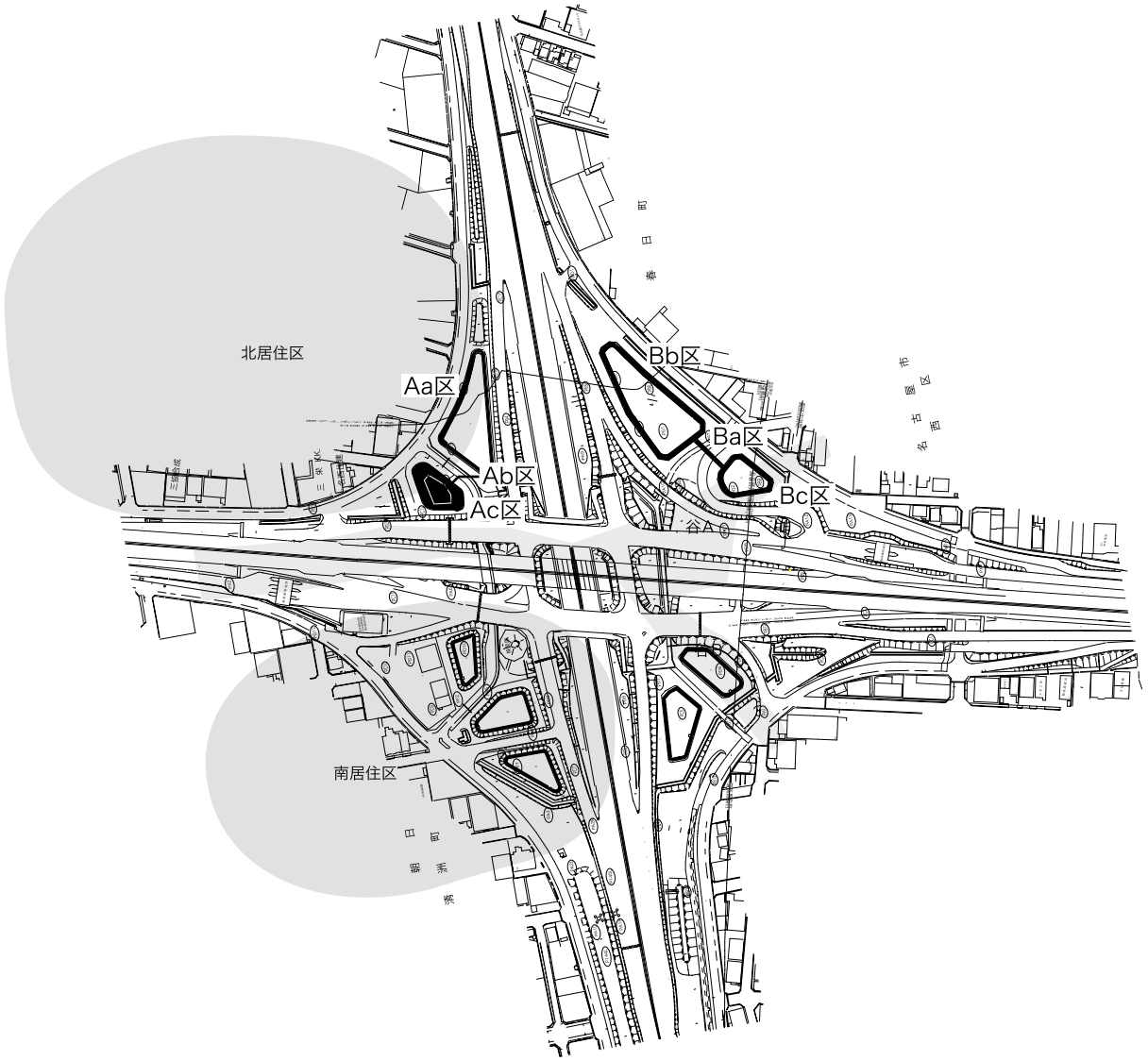
調 査 面 積　2,616㎡

担　当　者　石黒立人・加藤博紀・川添和暁・早野浩二



調査地点（1/2.5万「清洲」）

調査の経過　本遺跡は、西春日井郡清洲町を中心に同春日町・新川町・名古屋市西区に広がる東海地方屈指の弥生時代集落である。平成10年度より清洲JCT建設に伴い、当埋蔵文化財センターによる発掘調査が継続されている。調査は、名岐道路建設に伴う事前調査として、国土交通省愛知国道事務所・日本道路公団中部支社・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は、2,616㎡を対象に、04Aa区・04Ab区・04Ac区・04Ba区・04Bb区・04Bc区の６調査区を設定し、調査を行った。



平成16年度調査区位置図

調査の概要
04Aa区

調査区は平成11年度に調査された99Ac区を挟み、また愛知県教育委員会が昭和54年度に調査した第78区～第82区の西側に位置する。検出された遺構は、大きく弥生中期前葉・弥生後期前半・古墳時代初頭・中世の４時期に分けられる。

弥生中期前葉の遺構としては、竪穴住居跡10軒程度・土坑多数・貝層・炉跡などがある。竪穴住居には方形プランと円形プランの両者がある。調査区北側を中心に、土坑内における貝層の堆積とともに、一部が遺構外に斜面堆積している様子が確認された。またそれに伴う焼土・炭化物を伴う炉跡が２基(SF01・SF02)と平坦面を作り出すための整地部分が検出された。SF01は径約３mの円形で、SF02に比べより広範囲に広がっているばかりか、その縁辺で貝層と焼土は互層をなし、貝層堆積と焼土形成が連続して行われていたようである。一方、整地層は貝層下および貝層中にも確認できたことから、貝層・焼土の形成直前および形成中に、整地作業が行われたようである。貝層の貝種はマガキが主体であり、ハマグリ・ヤマトシジミが若干含まれる。

弥生後期前半の遺構としては、竪穴住居跡12軒・環濠１条・区画溝１条がある。環濠は内環濠と考えられ、検出時で幅約１m70cm・深さ約１m50cmを測り、断面形状は逆台形である。区画溝は内環濠に直交するもので、検出時で幅約２m50cm・深さ約１m80cmを測り、これも断面形状は逆台形である。両者とも昭和54年度の調査でも確認されているものである。竪穴住居跡は、調査区全面で検出された。方形住居のみであり、長軸は北西―南東方向が中心である。構築材などの炭化物が多量に出土する住居跡(焼失家屋)もいくつか見つかっている。また、99Ac区に南接するSB01やその付近からは、ガラス小玉および管玉がまとまって出土している。

古墳時代初頭の遺構としては、竪穴住居跡３軒がある。調査区の南端・中央・北端に見られ、調査区周辺での居住地形成がこの時期に終焉したようである。いずれも方形プランであり、長軸は北西―南東方向が中心である。SB02では、住居内から土器群がまとまって出土した。

中世の遺構では、方形土坑が３基見つかっている。　　（川添和暁）



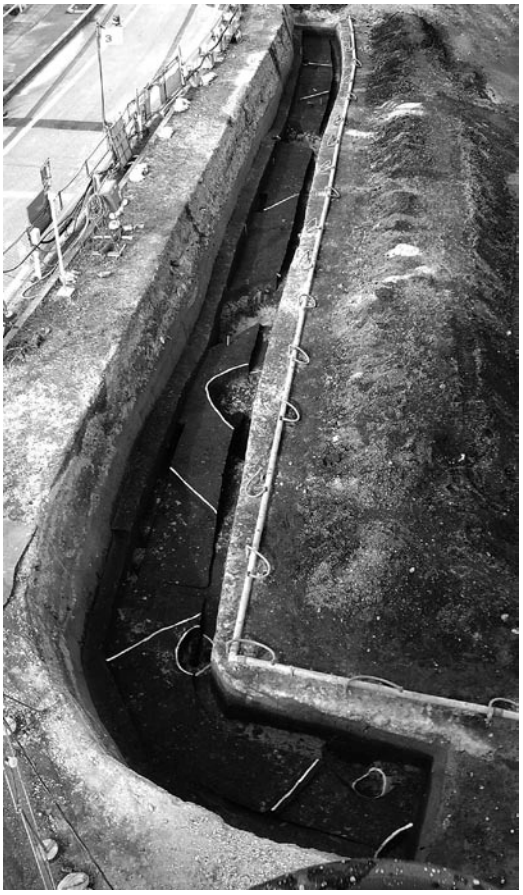
SF01および貝層検出状況（南西より）



SF01および貝層セクション（東より）



弥生時代後期～古墳時代初頭遺構全景（南より）



弥生時代後期前半遺構全景（南より）



弥生時代中期前葉遺構全景（南より）



SB01遺物検出状況（南より）



SK93（東より）

04Ab･Ac区　04Ab・Ac区は、北居住区と谷Ａの北岸が接する位置に相当する。調整池の底面となる04Ab区については、愛知県教育委員会との協議により、調査の対象を弥生時代後期の遺構が展開する調査区北半に限定し、調査区南半の弥生時代中期以前の遺構と堆積層は保存した。調査した主な遺構は、弥生時代後期の環濠３条、弥生時代中期後葉の大型土坑と貝層、弥生時代中期前葉の環濠１条、弥生時代の河道（谷Ａ）、中世の方形土坑である。

弥生時代後期の遺構として、北居住区を囲繞する環濠３条を検出した。環濠の幅は2.5ｍ前後、深さは1.5～2.0ｍである。内環濠SD01と外環濠SD02は後期前葉に開削され、埋没後、後期中葉にSD01を外環濠として再掘削すると同時に、内環濠SD03が新たに掘削される。つまり環濠は、２条が同時期に併存して機能したことになる。２条の環濠は、当初は断面逆台形､再掘削時には断面V字形に掘削され､掘削土は環濠間の盛土としている。また、環濠は遅くとも古墳時代初頭までにその機能を停止していることも確認した。

特筆すべきは、外環濠SD02が陸橋部を形成し、北居住区が南東に向けて開放することが判明したことである。加えてSD02が外方に向けて弧状に張り出すことは、半島状に突出する区画（別区？）を設定する意識があったことをも連想させる。

SD02には、木製品と土器を主とする遺物が大量に廃棄されていた。出土した木製品には彩色楯、工具（鑿？）の柄、武器形、合子蓋、高杯、筒形容器、丸木舟などがある。工具の柄は彩色がある優品である。なお、後期の環濠に貝の廃棄は認められなかった。

弥生時代中期後葉の大型土坑SK03は、谷Ａ北岸近くにおいて検出した。径約4.5ｍの円形で、擂鉢状に掘削される｡SK03にはハマグリ、アカニシを主体とする貝と石斧柄、鋤・鍬などの木製品が大量に廃棄されていた。中期後葉の貝層は同じくハマグリ、アカニシを主体とし、北居住区の縁辺から谷Ａにかけて広範囲に形成される。

弥生時代中期前葉の環濠SD10は､SD01南岸に一部重複しながら、谷Ａ北岸に沿って掘削される｡04Ab区で検出した部分については遺構を保存したため、04Ac区においてその一部分を調査したにすぎない。

中世の方形土坑は谷Ａ近辺に集中する傾向が認められた。

04Ab・Ac区の調査においては、弥生時代後期の環濠の開削と再掘削の時期を明確にしたこと、環濠開口部付近の景観復原に関係する資料を得たことが特筆すべき成果である。これらは後期の環濠集落の機能的な問題にも直結する重要な知見である。また、環濠から一括出土した土器群や木製品群は器種も豊富で、単一時期の遺物組成を示す良好な資料体としての評価が与えられる。



04Ab区全景（弥生時代後期）



SD01高杯



SD02



SD02彩色楯



SD02パレススタイル壺



SD03



SK03断面



04Ac区

04Ba・Bb区　04Ba・Bb区は、北居住区の東外縁に相当する。検出した主な遺構は、弥生時代中期前葉の竪穴住居と土坑、中期中葉～中期後葉の方形周溝墓、後期の竪穴住居、中世の水田と方形土坑である。

弥生時代中期前葉の遺構は、04Bb区北東部分を中心に分布し、より東の地区には安定した居住域が続くことも想定できた。検出した遺構は竪穴住居と大型の廃棄土坑などである。竪穴住居は床の構築が複数回に及ぶものが多く確認され、遺物も濃密に出土した。廃棄土坑は長軸2.0m以上、短軸約1.5m、深さ約1.5mで、平面形は長楕円形状と推定される。土坑には種子などの自然遺物も遺存する。また、04Bb区南西では、谷に面した緩傾斜面に遺物が大量に廃棄されていた。

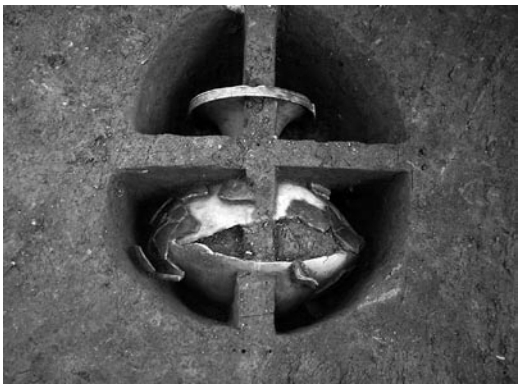
弥生時代中期中葉～中期後葉の方形周溝墓は調査区全域に分布する。中期後葉の方形周溝墓については、17基を確認した。これらは04Bb区北西、北居住区の環濠帯に接する地点から順次築造され、04Bb区の南東方向に徐々に造墓範囲を拡大したことも明らかとなった。墳丘盛土の残存は良好で、盛土内に埋設された土器棺を６基確認した。周溝は基盤層を深く掘削し、掘削土は墳丘盛土としている。周溝の幅は3.0m前後で、周溝底面からの墳丘の高さは約2.0mに達する。周構内各所からは供献土器が出土した。他に特筆すべき遺物として、04Bb区北西端の方形周溝墓の上層より出土した腕輪形（貝輪形）土製品がある。



04Ba区方形周溝墓



04Bb区方形周溝墓



04Bb区土器棺



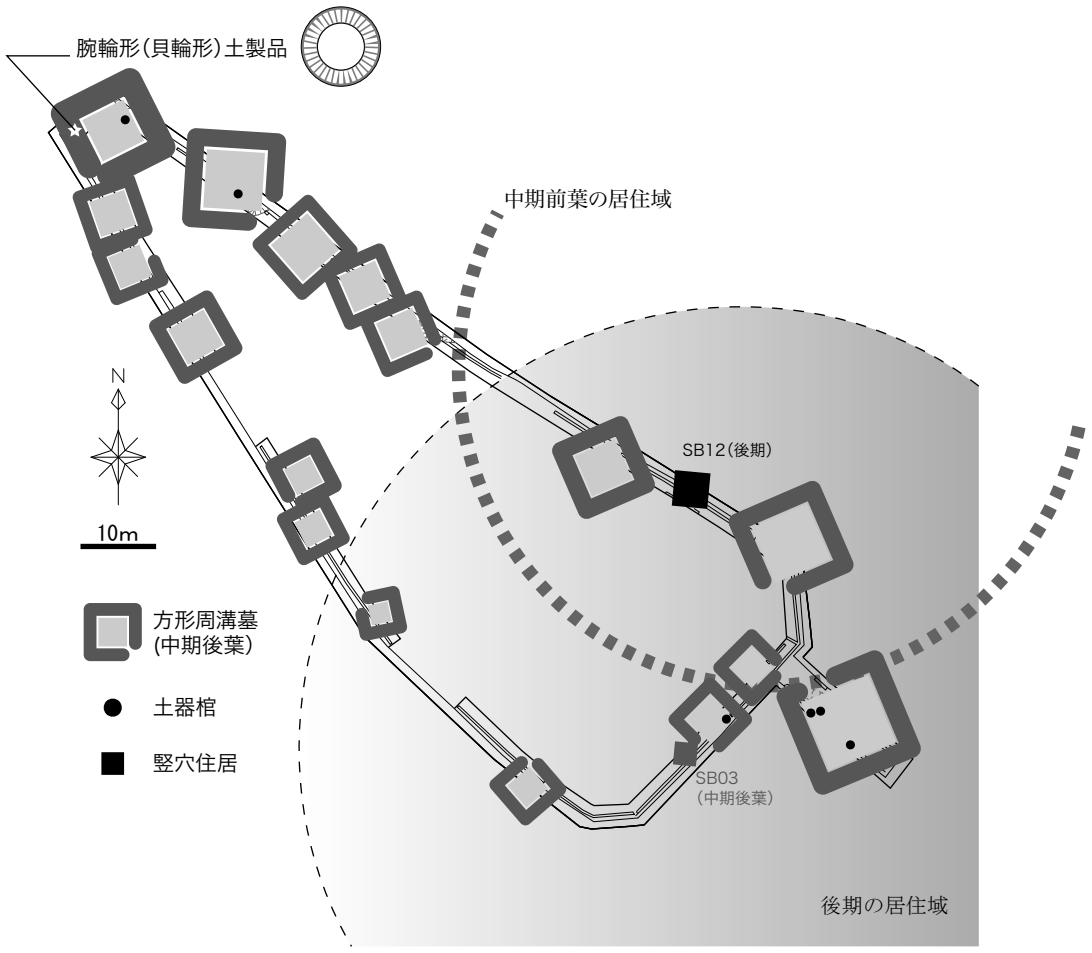
04Bb区SB12

中期中葉の方形周溝墓は、中期後葉の方形周溝墓との重複によって、全体像を把握することが困難であった。概して小規模で、供献土器がともなうことはまれである。

弥生時代後期には方形周溝墓の埋没が進行し、04Ba区、Bb区南東は散在的な居住地へと移行する。居住地は埋没過程の方形周溝墓の起伏を利用して住居や配水路を配置し、周溝にはしばしば土器を廃棄する。竪穴住居SB12では土器の一括出土、柱根の遺存を確認した。

中世の水田は重複関係から、方形土坑に先行することが明らかとなった。なお、04Bb区北西の北居住区から続く微高地端部、04Bb区南西の谷に面した南西方向への緩傾斜面を中心に、縄文時代後期の土器の分布が確認された。

04Ba・Bb区の調査においては、広域に展開する方形周溝墓群を良好な状態で調査できたことが特筆される。加えて、縄文時代から近世に及ぶ景観、土地利用の変遷を詳細に跡づける新知見が数多く得られた意義も大きい。これらの情報によって、従来不明瞭であった東居住区と東墓域の構造の理解が大きく前進するものと思われる。　　（早野浩二）



04Ba・Bb区遺構配置図（1：1,000）

高木（たかぎ）遺跡

所　在　地　扶桑町大字高木
（北緯35度21分35秒 東経136度54分29秒）
調 査 理 由　県道草井・羽黒線道路改築
調 査 期 間　平成16年４月～平成16年５月
調 査 面 積　850㎡
担　当　者　石黒立人・加藤博紀



調査地点（1/2.5万「犬山」）

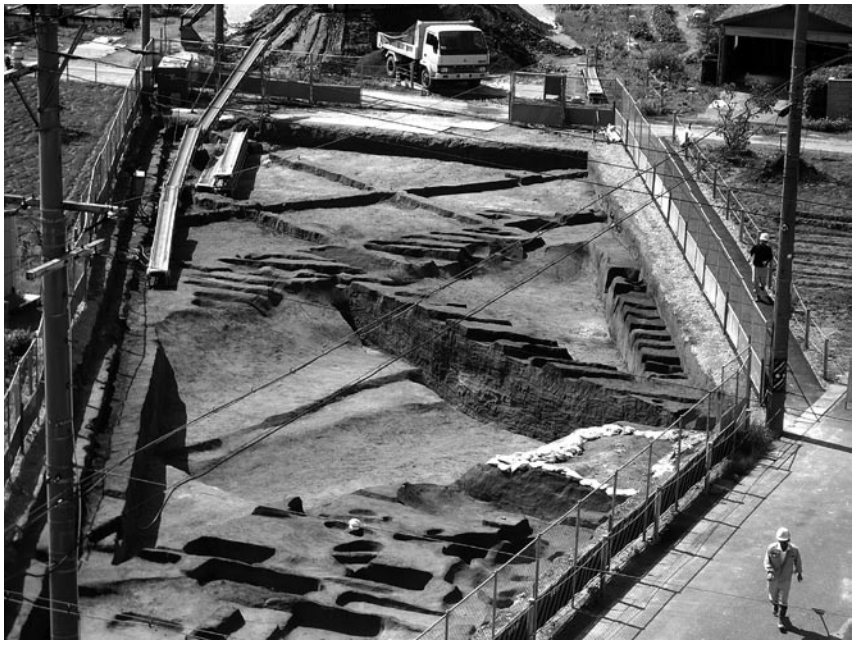
調査の経過　本遺跡の発掘調査は県道草井羽黒線道路改築に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成16年４月から５月にかけて実施した。調査面積は850㎡である。

立地と環境　扶桑町は木曽川の左岸に位置し、犬山市と江南市に挟まれる。高木遺跡は標高30m前後の犬山扇状地上に立地し、北西および南東には旧木曽川の流路が谷地形を残している。

調査の概要　今回の調査区は平成15年度調査区の南東に位置する。上面の調査結果は前回同様であり、遺構検出面は幅の狭い撹乱溝によって縦横に裁断され、部分的に方形土坑が遺存していた程度であった。遺物の出土もあまり多くは無かった。

下面では幅約14m、深さ２mほどの大溝（SD01）を検出した。遺物の出土量は上面同様けっして多くはなかったが、７世紀後半代の須恵器が出土した。堆積層は、下部に砂層があることから水流の存在がうかがえたけれども、底面は土壌化しており、当初は乾燥していたと判断される。

大溝の方向は調査区内ではほぼ南北であり、扇状地を斜に横断している。水流の存在は木曽川旧流路に接続していることを示すと考えるが、当初乾燥していたことは、水路ではなく微高地を横断する「切り通し」的なものでなかったかと想像させる。　（石黒立人）


SD01全景　南東から

惣作（そうさく）・鐘場（かねば）遺跡



調査地点（1/2.5万「猿投山」）

所在地　瀬戸市惣作町、鐘場町地内町
（北緯35度13分4秒 東経137度7分42秒）

調査理由　国道248号線建設

調査期間　平成16年４月～10月

調査面積　10,200㎡

担当者　酒井俊彦・鵜飼雅弘・樋上 昇・武部真木・川添和暁

調査の経過　調査は県道瀬戸設楽線建設のため愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、平成12年度より実施している。平成12年度は遺跡範囲の南部、平成13～15年度は南部および北部と一部中央部の調査を行った。先年度までの延べ調査面積は13調査区20,575㎡である。これまでの調査によって旧石器時代末から近世までの遺構・遺物が検出されている。今年度は遺跡北部に１調査区、中央部に４調査区と北部に１調査区を設定して調査を実施した。今回が本センターの行う最終調査となる。

立地と環境　惣作・鐘場遺跡は瀬戸市東部の惣作町・鐘場町に所在し、矢田川支流である赤津川の左岸の標高170m前後の２段よりなる洪積河岸段丘上に立地する。周囲は山地および丘陵地帯であり、盆地の中央に展開する。遺跡は赤津川と門前川を西限及び南限とし、北側と東側は山地に接する。惣作川を挟んで地形的に南北２つに別れる。周辺には南側に太子縄文遺跡、太子遺跡、北東部の山地部に大目神社古墳、巡間Ｅ窯跡、瓶子窯跡、凧山Ｃ窯跡、凧山窯跡、凧山屋敷遺跡、凧山Ａ窯跡、赤津川上流に長谷口遺跡、八王子遺跡など旧石器時代から縄文時代が主体となる遺跡と中世以降の古窯跡が分布する。

調査の概要　調査区として、遺跡北部にＡ区1,850㎡、中央部にＢ～Ｅ区計7,750㎡、南部にＦ区600㎡を設定した。

０４Ａ区　南北に長い段丘の上位面と一部下位面に位置する。東側は惣作川の河谷に面し、西側と南側は下位段丘面である。隣接する部分の調査は平成13・14年度に行っている。調査区全体に近年の耕作による削平が著しい。主な遺構としては、弥生時代後期、古墳時代、奈良時代の竪穴住居を多数検出したが、遺構の遺存状況は悪く、遺物も全体として少量である。

弥生時代については、02Ｂ区で銅鐸型土製品を出土したSB01の残りの部分を検出した。弥生時代後期から古墳時代前期にかけては11棟の竪穴住居を確認した。調査区南端部のSD01からは02Ｂ区と同じく古墳時代前期の遺物が比較的まとまって検出された。その他、調査区全体からは部分的なものと痕跡的なものを含め、約100棟の竪穴住居を検出した。古墳時代～奈良時代の時期に属すると考えられるが、全体として遺存状況が悪く、詳細は明らかにできない。

04B・C・D・E区　赤津川と門前川の間の南西から北東方向の段丘上に位置する。Ｅ区の南東部は門前川の河谷にかかる。Ｃ区の南東部とＢ区の大部分は低位段丘面にあたり、調査範囲の中央部は上位段丘面に相当する。調査区の北東端は惣作川の河谷に面する。南西に隣接する部分は平成12～15年度の調査が行われている。また、04Ｄ区の北西側は瀬戸市埋蔵文化財センターの調査が行われている。

この調査区で検出された主な遺構・遺物としては、古墳時代、中世および戦国時代と近世の時期のものがある。古墳時代の遺構としては前期の竪穴住居が２棟（SB07・08）、同後期が６棟（SB01～06）検出された。SB07・08はいずれも北東側に竈が検出され、土師器甕などが比較的まとまって出土している。SB01～03は隣接する平成15年度の03Ｂ区で同

時期の竪穴住居が展開し、その住居群の一部である。6世紀代の時期と考えられる。SB04～06は軸を同一方向にとる。遺存状況は悪く、出土遺物がわずかなため詳細は不明であるが、6～7世紀の時期に属す。04B区東半部分の下位段丘面において、基盤層の最上層の黒色土中でこの時期の土器が少量検出されている。中世以降、この面は水田であることが確認されている。溝、畦畔などは検出されず、花粉分析ではプラントオパールなどの結果は出ていないが、古墳時代にも生産域となっていた可能性がある。

中世の遺構としては、掘立柱建物の柱穴と考えられる土坑多数および、竪穴状遺構1基（SX01）が検出された。戦国時代以後の遺構に切られ、混在するために詳細は明らかにしえないが、03B区にかけて集落が存在したと考えられる。また、B区からC区南東部にかけての低位段丘面に水田耕作にともなうと考えられる溝が展開する。段丘面は惣作川から門前川に向かってわずかに傾斜し、溝は傾斜の方向に沿う形で最大4条が平行して検出された。埋土は黄白色粗粒砂を基本とし、流水の痕跡が認められる。少量の山茶椀が出土した。同層位で近世以降の水田耕作土がのるため、この時期の畦畔などの遺構は検出されなかった。その他、E区の門前川の河谷では基盤面に近い層序から、谷に沿う方向に杭列が検出された。河谷埋土から13～14世紀の包含層が検出され、山茶椀、古瀬戸施釉陶器、少量の木製品などが比較的まとまって出土した。

戦国時代の遺構は、B区からD区にかけて多数の掘立柱建物の柱穴および土坑、井戸4基（SE01～04）、溝などが検出された。土坑はC区南西半に密集して検出され、この部分を中心に南西側と北東から東側を大溝群が走り、集落域を形成する。集落域は北東から南西方向に走る溝群によって中央部が区切られている。大溝は検出面において、最大幅約8m同深さ1.5mを測る。南西側溝群は南東方向にむかって門前川の河谷に達している。北西側は瀬戸市埋蔵文化財センターの調査により北東方向に屈曲することが確認されている。北側の溝群は、東半はほぼ南北方向、西部は北西方向に角度を変える。新しい溝の掘り替えでは南東に屈曲して河谷に向かう方向をとる。これらは15世紀後半から16世紀前半の時期に属し、溝の切り合い関係から、最少3時期に細分される。調査区内では確認できないが、遺跡南西側で連結する可能性が高い。遺跡北西側では、一定の時期において連結することが考えられる。SB101は、比較的大形の掘立柱建物で、主軸を区画溝と同一方向をとる。SB102は大溝より新しい時期に属する。井戸は4基検出された。SE01・02は構造物が抜き取られているが、曲げ物を井戸側とする。SE03・04は桶組の井戸側で、SE04は方形井戸枠を有する大形のものである。

近世の遺構はC区東部で検出された。落ち込み状の遺構（SX02）から、17世紀代の瀬戸窯産施釉陶器、漆椀などの木製品が出土した。SE05、SE06はこの時期の石組み井戸である。

04F区

上位段丘面に位置する。東側は門前川の河谷であり、急傾斜面となる。

古墳時代前期の土坑および中世以降の土坑、溝などが検出された。近年の耕作に伴う削平などによって遺構の遺存状況は悪く、遺構・遺物は少ない。少量の古墳時代土師器甕、山茶椀などが出土した。

ま と め

B～E区の位置する部分は、遺跡の所在する盆地の中央部分に相当し、段丘の最高所にあたる。中世から連続的に集落が展開してきたものと考えられ、今回の調査では戦国時代に大規模な溝に囲まれた集落が形成されたことが確認された。この集落は近世初期には縮小し、以後廃絶している。このことに関する伝承などは現在のところ確認できていない。今後、この時期の集落の推移について文献をふくめて検討していく必要がある。

（酒井俊彦）

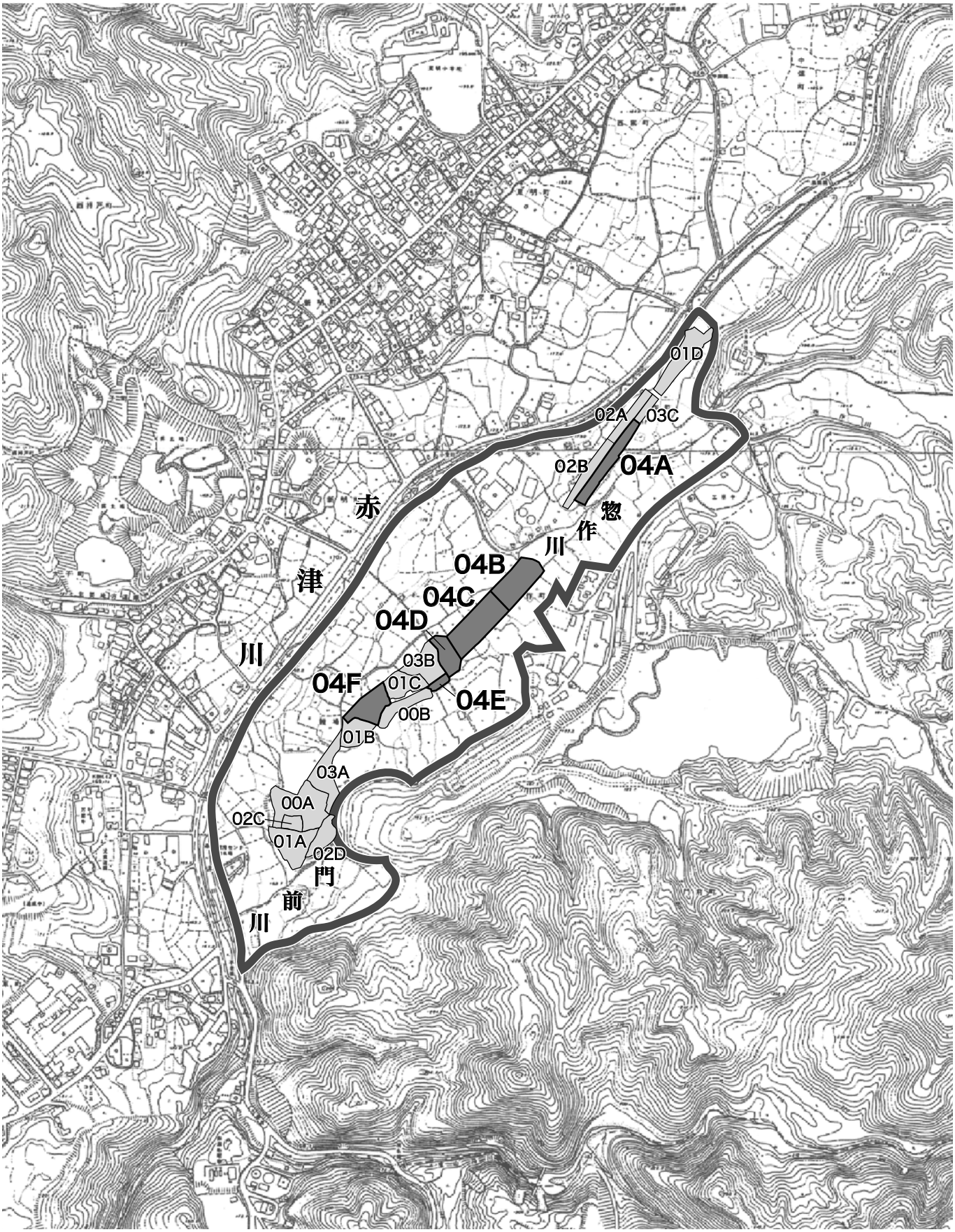


図１　調査区位置図（約1：7,000）

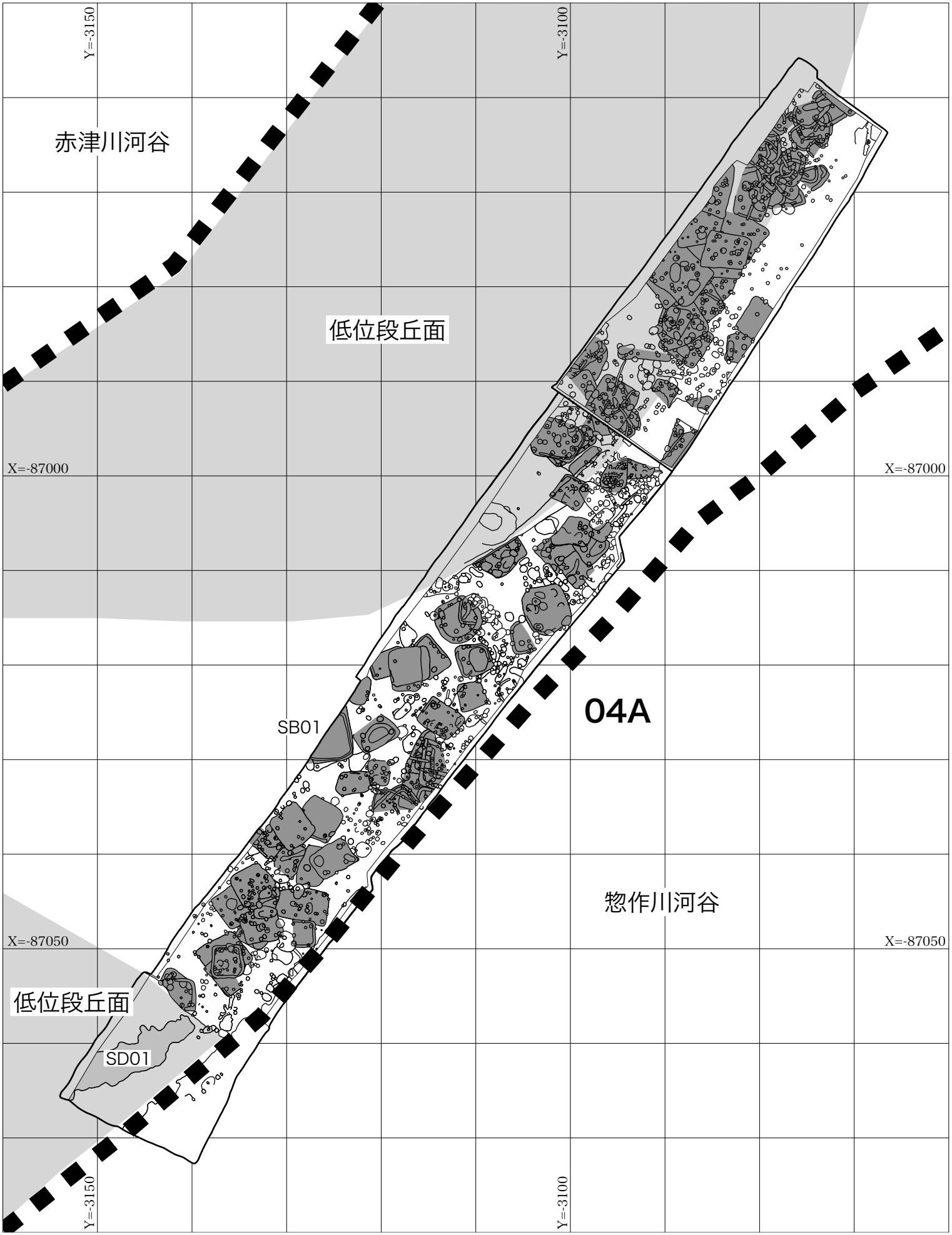
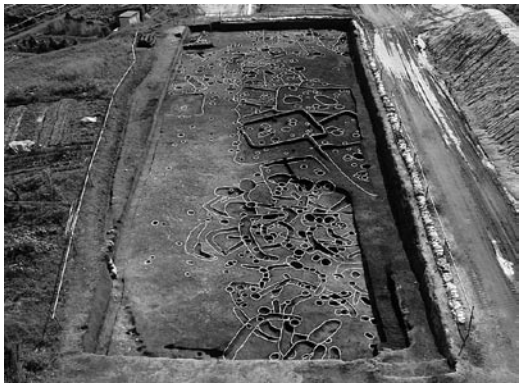


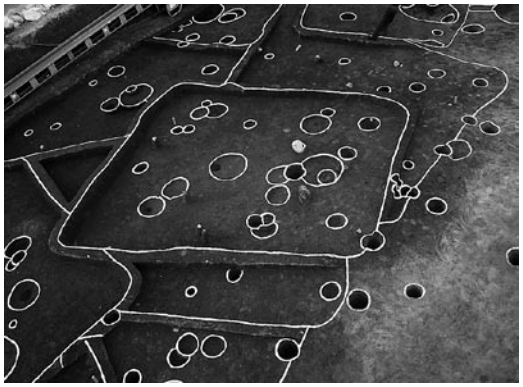
図2　A区遺構全体図（1：500）



Aa区全景　北東より



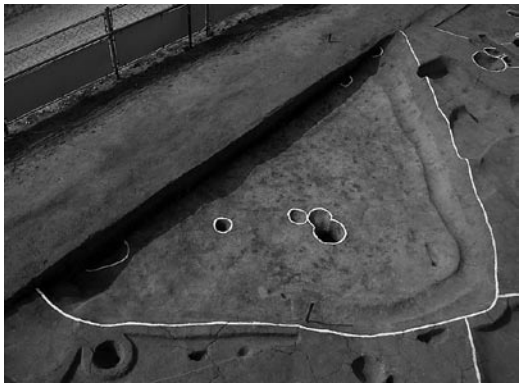
Aa区竪穴住居



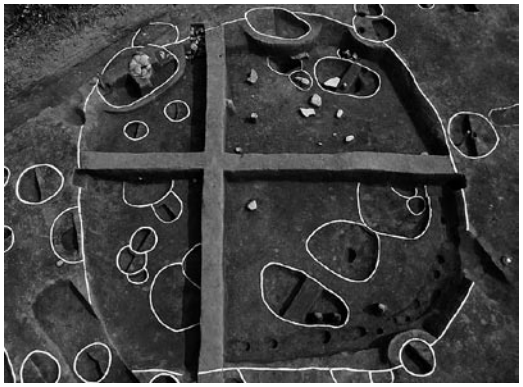
Aa区古墳時代竪穴住居



Ab区全景　北東より



Ab区弥生時代竪穴住居



Ab区古墳時代竪穴住居



古墳時代遺物出土状況



SD01　北東より

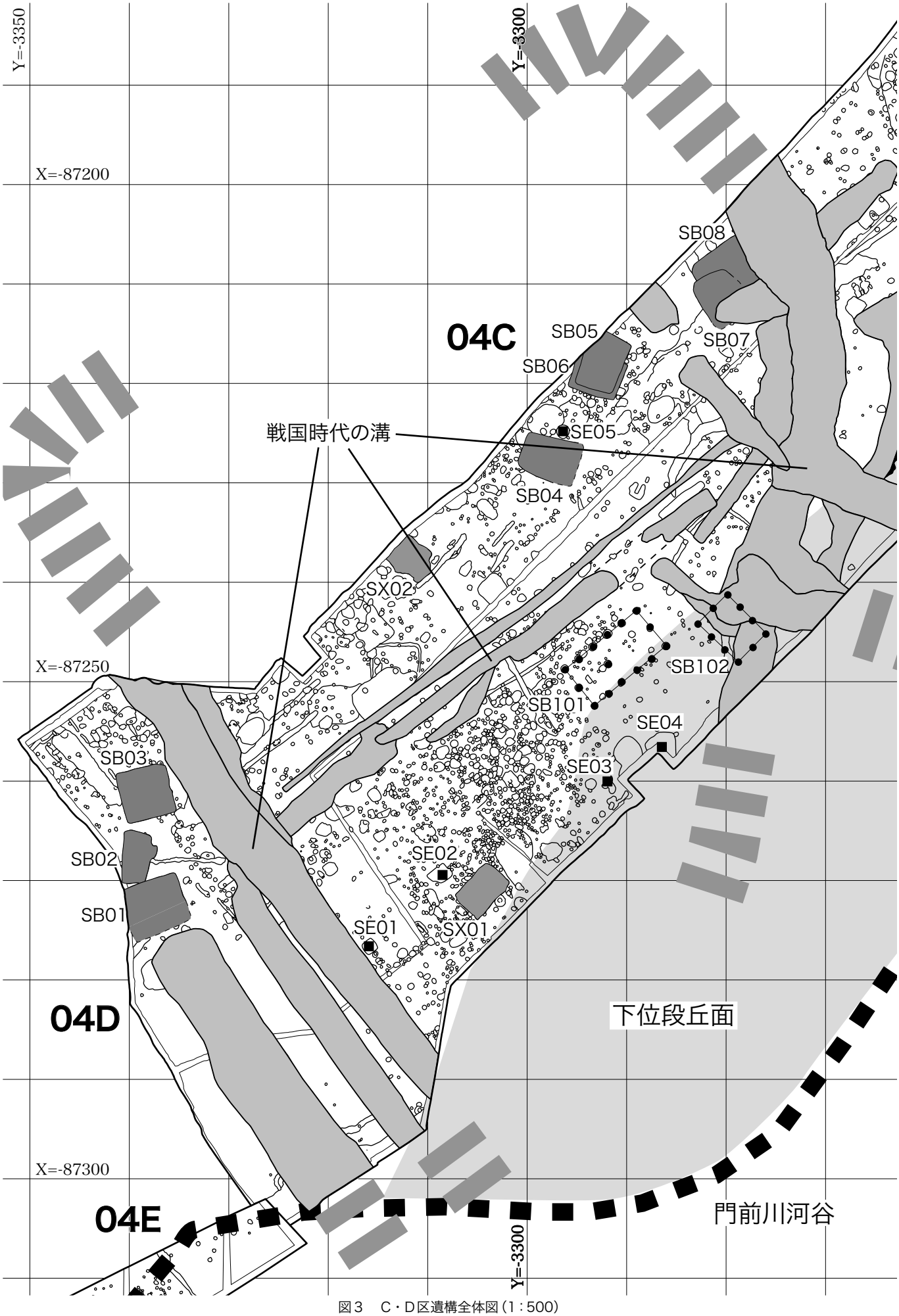


図3　C・D区遺構全体図（1：500）

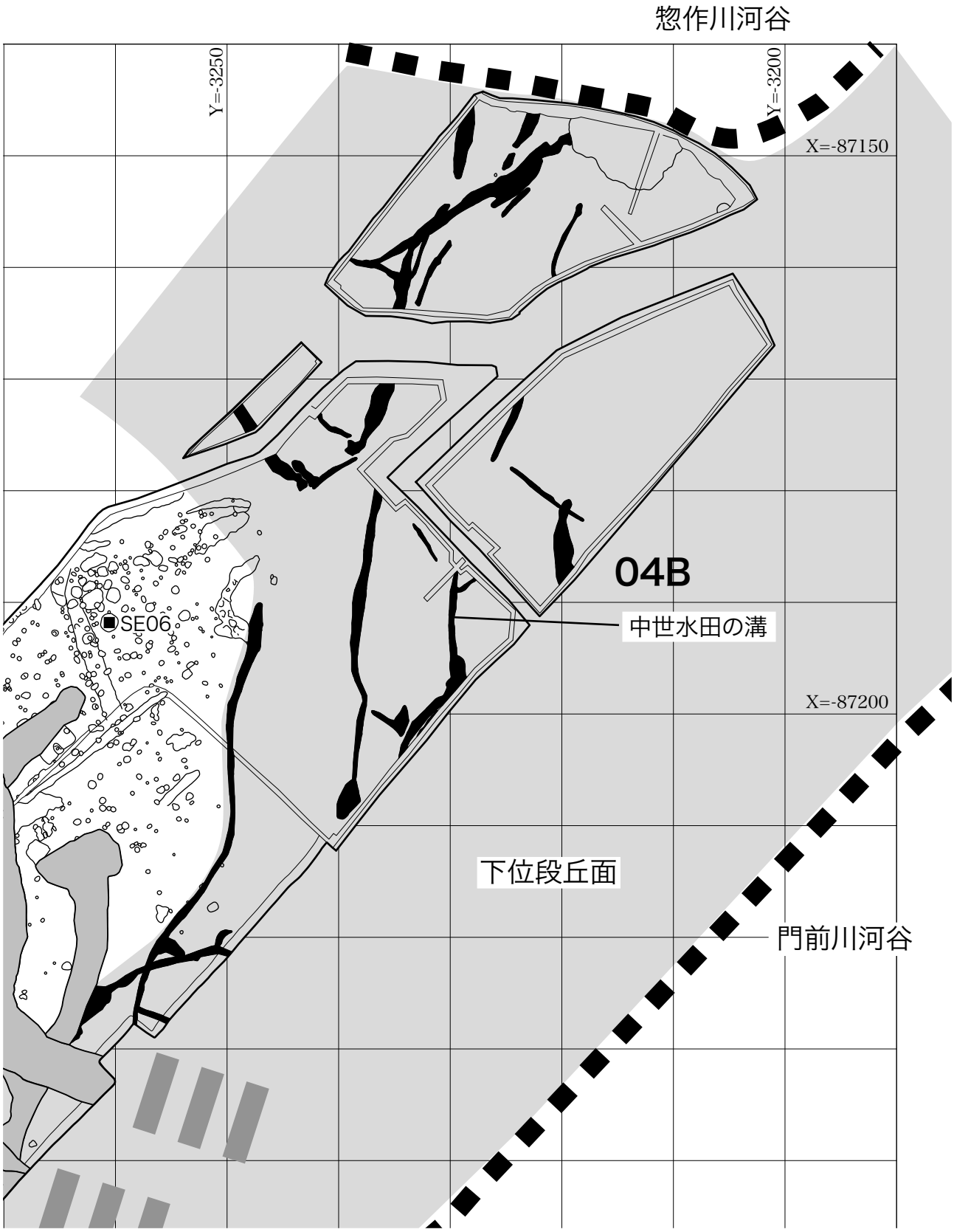


図４　Ｂ区遺構全体図（1：500）



B区全景　南西より



B区溝群　南より



B区溝完掘状況



Ca区全景　北東より



Ca区大溝群　北より



SB101　北東より



SE04　北東より



Cb区全景　南東より



Cb区大溝　南東より



Cb区竪穴住居群　南東より



SX02　南西より



Db区全景　南東より



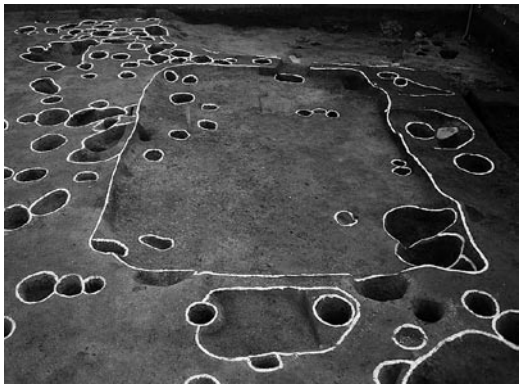
Db区大溝群　北西より



Db区古墳時代竪穴住居群　北西より



SE01遺物出土状況　南東より



SX01　南西より

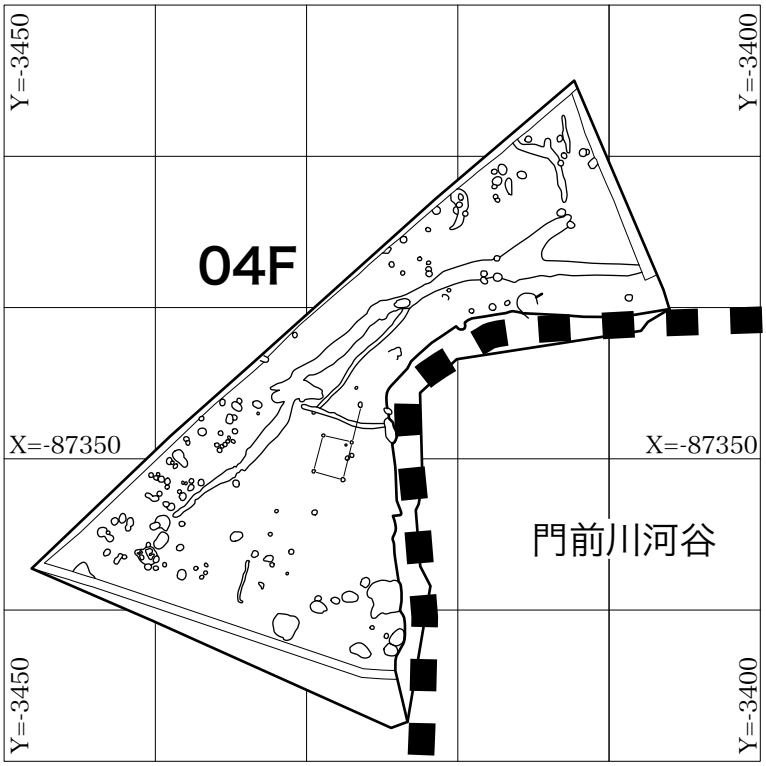


図５　Ｆ区遺構全体図（1：500）



Ｅ区全景　北東より



Ｅ区杭列　北西より



Ｅ区中世遺物出土状況



Ｆ区全景　南西より

桑下城跡（くわしたじょう）

所　在　地　瀬戸市上品野町桑下
（北緯35度15分22秒 東経137度8分19秒）
調 査 理 由　国道363号線改良工事
調 査 期 間　平成17年１月～３月
調 査 面 積　1,000㎡
担　当　者　酒井俊彦・樋上　昇



調査地点（1/2.5万「多治見」）

調査の経過　本遺跡は国道363号線の改良工事にともなう事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成17年１月から３月にかけて実施した。調査面積は1,000㎡である。

立地と環境　桑下城跡は、瀬戸市東部にある品野盆地の北東部に位置し、水野（品野）川と蟹川にはさまれた標高約200mの丘陵上に立地する平山城である。

文献および地元の伝承によれば、桑下城は応仁の乱の際、東軍に属して敗れた美濃国安八郡今須城主長江氏の一族、長江利景（近世地誌類では永井民部少輔）が尾張国春日井郡科（品）野の地に逃れて落合城（瀬戸市落合町）に入り、のちに築いた城とされている。長江利景は文明14（1482）年、今村城主の松原広長と大槙山・安土坂・若狭洞で戦って勝利を収め、瀬戸市一帯を手中にした。その後、16世紀に入ると、尾張・三河・美濃の国境に接するこの地は松平氏と織田氏で激しい勢力争いの場となり、享禄２（1529）年には松平清康（徳川家康の祖父）によって支配されるにいたる。そして、永禄３（1560）年、桶狭間の戦いの前哨戦として、前述の落合城や、水野川をはさんで桑下城の南側にある品野城とともに織田信長の攻撃を受けて焼失し、廃城となったとされている。

調査の概要　本年度は、蓬左文庫所蔵の絵図に残る桑下城の本丸および侍屋敷よりも西に位置する、丘陵西端部の調査をおこなった。その結果、のちに畑として改変は受けているものの、曲輪と考えられる平場を多数確認した。曲輪は、水野川に並行して走る中馬街道を意識して南側と西側にのみ築かれ、北側は武者走りとおもわれるわずかな平坦面しか存在しない。また、曲輪間を移動するための道も確認されている。遺物は少ないものの、おおむね15～16世紀代に属する。

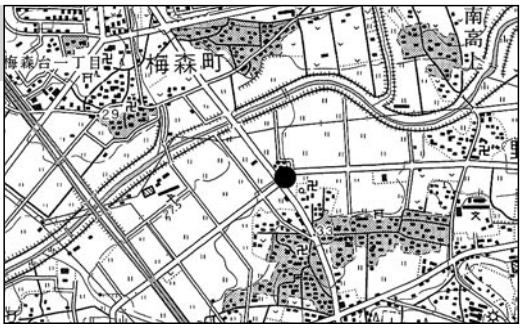
『愛知県中世城館跡調査報告Ⅰ』掲載の縄張り図や試掘調査の結果で、桑下城の範囲に入るか否か疑問視されてきた丘陵の西端部においても、曲輪が確認されたことから、桑下城跡は従来考えられてきた以上に大規模な城郭であり、その重要性があらためて認識されたといえる。今後、絵図にある侍屋敷の大半と本丸の北半部に調査がおよぶことから、その調査成果は戦国期の城郭研究に大きく寄与するものとおもわれる。　（樋上　昇）


全景　東から


全景　北から

三ヶ所（さんがせ）遺跡

所　在　地　日進市浅田町地内
（北緯35度7分47秒 東経137度1分20秒）
調 査 理 由　県道岩崎名古屋線道路改築
調 査 期 間　平成16年10月～12月
調 査 面 積　880㎡
担　当　者　永井宏幸



調査地点（1/2.5万「平針」）

調査の経過　調査は、県道岩崎名古屋線道路改築の事前調査として、愛知県道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として平成13年度（1,550㎡）と平成14年度（370㎡）の２次にわたりおこなっている。今回は３次調査にあたり、平成16年10月から12月にかけて実施した。調査面積は880㎡である。

立地と環境　三ヶ所遺跡は日進市の西部、浅田町地内に所在する。現在の国道153号線バイパス浅田西交差点の北東500ｍに位置し、天白川左岸域に展開する沖積地に立地する。現地標高は28m前後を測る。隣接する遺跡としては、古代から中世にかけての遺構・遺物を確認した西田面遺跡が500m南西にある。

調査の概要　調査の結果、古代から近世にかけての遺構・遺物が確認された。

古代の遺構としては、溝SD605と土坑SK704が確認された。SD605は南東から北西にむけて蛇行する自然流路と考えられ、現在の三ヶ所交差点に向かって天白川へと流れ込むと推定できる。流路の堆積は粗粒砂から砂礫層であり、この中から大量の灰釉陶器椀・須恵器などが出土した。SK704は調査区南壁にあり、調査区外へ延びる方形状の落ち込み。炭化物層が上層を覆い、その下部から把手付灰釉陶器小瓶片が出土した。中世の遺構としては、ほとんど近現代の整地により削平を受け、痕跡程度の溝が数条確認されたのみである。今回もっとも多く確認された遺構は、近世以降の土坑である。遺物をほとんど含まない人為的に埋めた土坑。性格は不明なものの、７基以上の土坑が縦列に並ぶ。この他、調査区を南東から北東に縦断する水路が２条ある。検出当初にビニールなどが混在していたので耕地整理直前まで使用していた水路と判断した。　（永井宏幸）


04A区全景


縦列配置の土坑群

桜鐘古窯群（さくらがね）

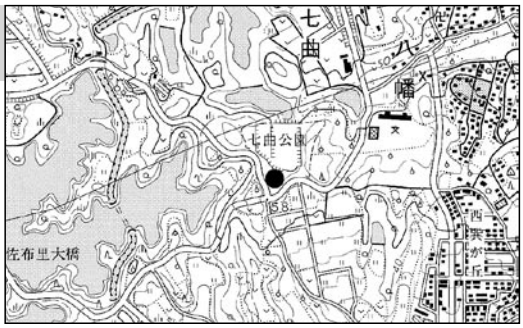
所　在　地　知多市佐布里字奥茂長田
（北緯34度57分55秒 東経136度54分1秒）

調 査 理 由　工業用水道事業

調 査 期 間　平成16年４月～６月

調 査 面 積　536㎡

担　当　者　宮腰健司・池本正明



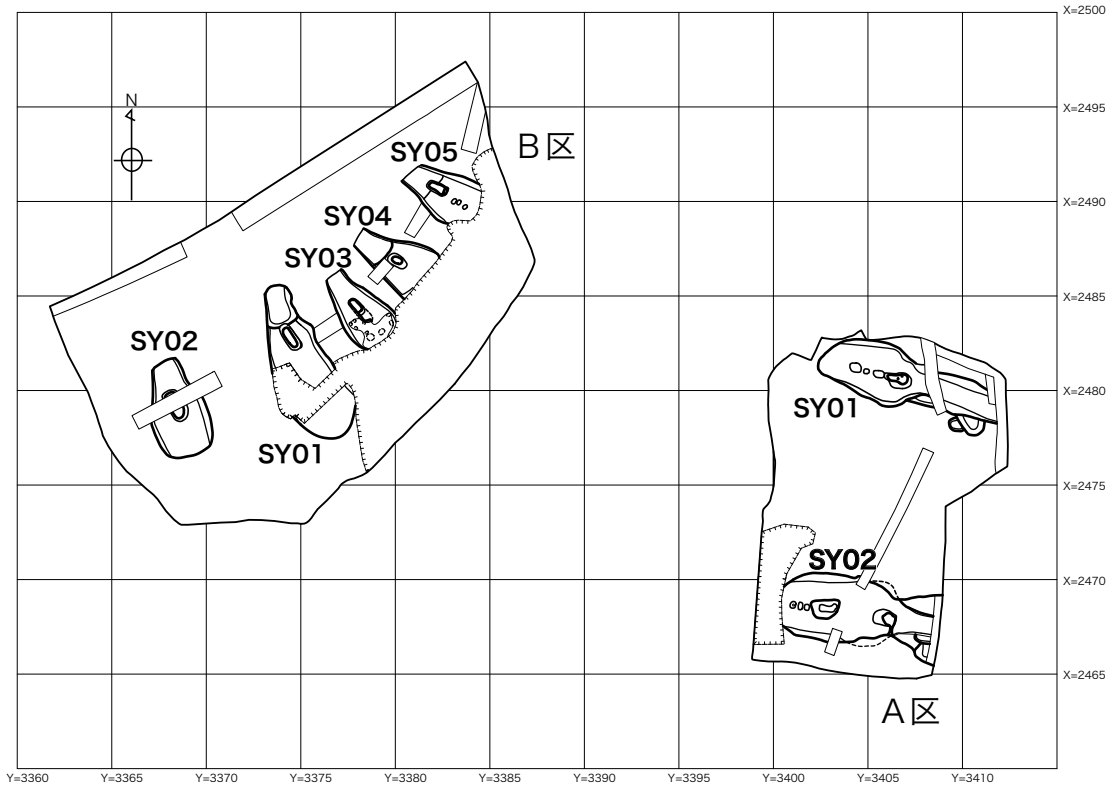
調査地点（1/2.5万「刈谷」）

調査の経過　調査は工業用水道事業に伴う事前調査として、愛知用水水道南部事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査面積は536㎡である。

調査区は、北東に向けて伸びる小尾根の頂部付近となる。調査区周辺は、工業用水道事業計画が開始される以前に、一部を除き標高60m前後に削平されていた。このため、調査は残存する斜面部のみを対象とし、南東側斜面をＡ区、北西側斜面をＢ区とした。

調査の概要　調査の結果、Ａ区で２基、Ｂ区で５基の窯体を検出した。窯体の残存状態は良好とは言えず、いずれの窯体も燃焼室と焼成室の下半部が残存するにすぎない。

窯体構造で特徴的となるのは、Ａ区SY02の焼成室内に設置されたいわゆる「支柱」がある。Ａ区SY01、Ｂ区SY05の床面でもその痕跡が確認でき、ここでも設置されていた可能性が高い。また、分焔柱を焼成室側に伸ばす改修が、Ａ区SY01・02、Ｂ区SY01・03で確認できた。このうち残存状況が良好なＡ区SY01でその手順を観察すると、分焔柱基底部の少し上方に直径５㎝程度の杭を打ち込み、スサ入り粘土を巻き付けた直径10～15㎝程度の棒状の粘土塊を作った後、これを支えとしてさらにスサ入りの粘土を貼り付けて、基底部計測で0.5m程度焼成室側に分焔柱を伸ばしている。



遺構平面図（1：400）

次に、遺物の出土状況で特徴を探すと、まずA区SY02の焼成室最下部の壁際から、ほぼ完形となる甕が伏せられた状態で出土している。甕は焼成時には底部を下として窯詰めされており、焼成後に改めて天地逆に置かれたものと考えられる。伏せられた甕は底の一部が剥離しており、これが原因して窯内に遺棄されたものかもしれない。ただし、甕の出土位置が焼成室から見て分焔柱手前にあたり、製品搬出作業の障害となることから、一応遺棄以外の可能性も考慮しておきたい。また、B区SY01では、分焔柱の補修部分にほぼ完形な壺を塗り込めている。ただし、分焔柱の中央が大きく攪乱により抉られており、詳細は明らかではない。

出土遺物は、壺・甕・鉢が主体となり、椀・小皿がこれに加わる。時期は13世紀後半（6a型式期）が中心となっている。出土遺物は未整理だが、A区SY01の製品に鳥をモチーフとした押印文が数点確認されている。

（池本正明）



A区全景



B区SY03



A区SY02



分焔柱断面



B区SY02分焔柱



鳥押印文

夏敷（なちき）古窯跡



調査地点（1/2.5万「常滑」）

所　在　地　常滑市夏敷地内
（北緯34度53分41秒 東経136度50分59秒）

調 査 理 由　常滑西特定土地区画整理事業

調 査 期 間　平成16年４月～７月

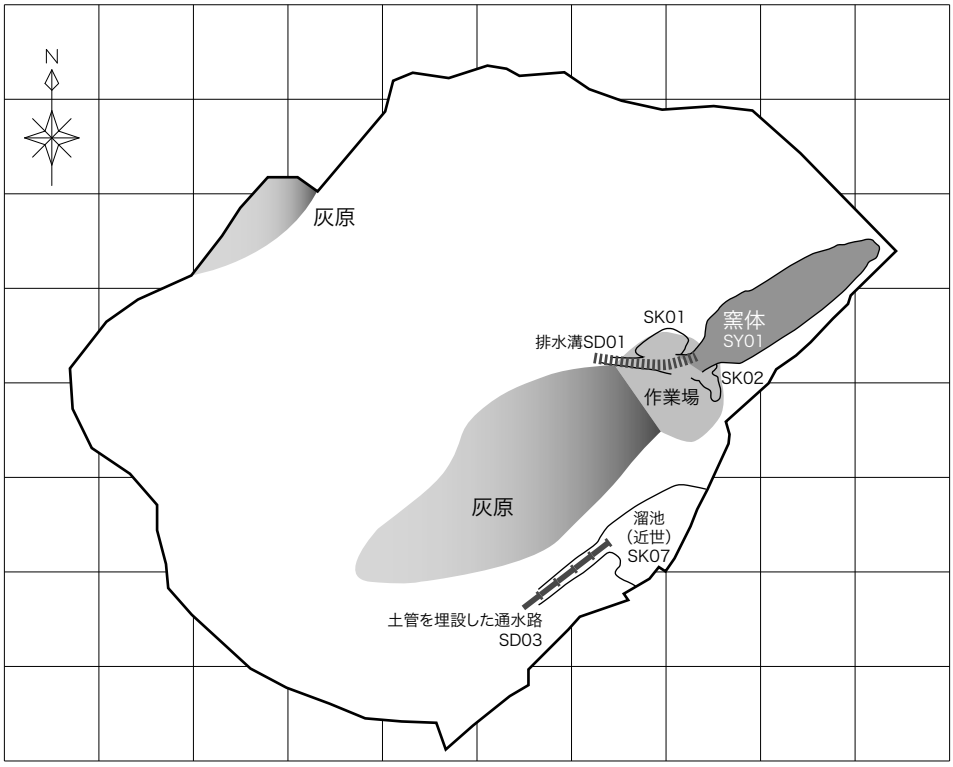
調 査 面 積　915㎡

担　当　者　宮腰健司・早野浩二

調査の経過　夏敷古窯跡は、常滑市夏敷地内に所在する中世常滑焼の古窯跡である。本窯跡の発掘調査は、常滑西特定土地区画整理事業に伴う事前調査として、都市基盤整備公団（現独立行政法人都市再生機構）より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成16年４月～７月、調査面積は915㎡である。

立地と環境　夏敷古窯跡は、知多半島中央丘陵から西に派生する尾根先端付近の南西斜面に立地する。尾根の標高は約33mである。同一尾根の北斜面には四池Ａ・Ｂ古窯、尾根小谷中の東斜面には蛇廻間古窯跡、支谷を挟んだ東尾根上には柴山古窯跡群が立地する。

調査の概要　発掘調査の結果、主要な遺構として窯体１基（SY01）、窯体に付随する作業場と灰原を確認した。窯体の南東側、北西側と灰原の末端は農地や溜池、道路の造成による大きな改変を受けていて、本来の窯体の基数、灰原の正確な規模は不明である。また、灰原南西の造成地に近世の溜池（SK07）とそれに付随する通水路（SD03）を検出した。



遺構配置図（1：400）

窯　体
ＳＹ０１

調査区の東端において検出した。主軸方向はN―123°―Wである。窯体の残存は良好で、焚口から煙道部までが残存し、燃焼室の天井の一部は原位置を維持していた。現存する長さは約11.5m、最大幅は焼成室で約３mである。焼成室には硬化した床が部分的に残存し、焼台の配列、鉢の高台が剥離した痕跡が確認できた。床面の最大傾斜は約35°である。窯壁は１面が残存するのみで、全面的な補修は確認されず、床面下施設も構築されていなかった。また、焼成室には崩落した天井の上面に層厚約５㎝の炭化物層が堆積していた。その成因は炭焼窯としての窯体の再利用にあると考えられる。

作業場

焚口から前庭部状に続く平坦面を作業場とした。作業場においては、築窯時の整地に伴う陶器を含まない焼土・炭化物の薄層が広がる。前庭部西には排水溝SD01が付随し、下層には除湿を目的とした炭化材の充填が確認できた。前庭部の東西には土坑SK01・SK02が掘削され、焼土・炭化物・陶器が大量に廃棄されていた。

灰　原

灰原は前庭部の南西斜面に分布し、窯体の主軸方向に約16m、それと直交する方向に約８mが残存する。厚さは最大で約１mである。灰原の分布、堆積の状況から、灰原の形成はSY01１基に付随する可能性が高いと思われる。また、調査区西端部の埋没した斜面上にも遺物の分布が認められた。産状が灰原の末端にも近似することから、SY01の西北に並列して別の窯体が存在した可能性もある。

出土遺物

遺物は灰原から出土した陶器が大部分を占める。これらは常滑窯編年３型式を主体とし、12世紀後半の年代が与えられる。焼成された器種には甕、鉢が多く、次いで三筋壷、碗、皿、少数の羽釜、水瓶がある。他に炭焼窯の操業に関係すると考えられる13世紀前半の土師器伊勢型鍋と山茶椀、溜池の通水路用の床樋として利用された土管がある。（早野浩二）



調査前



調査風景



調査区全景



窯体と灰原



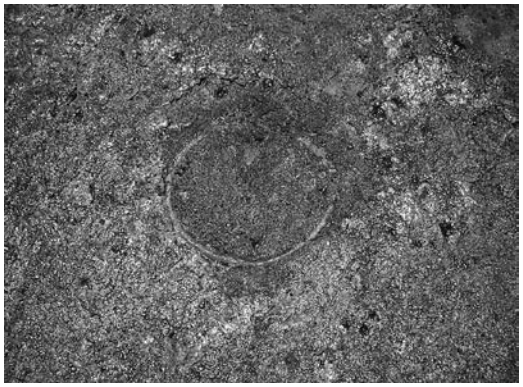
SY01（焚口から）



SY01（煙道部から）



SY01窯壁



SY01床面



SK01陶器



灰原の産状



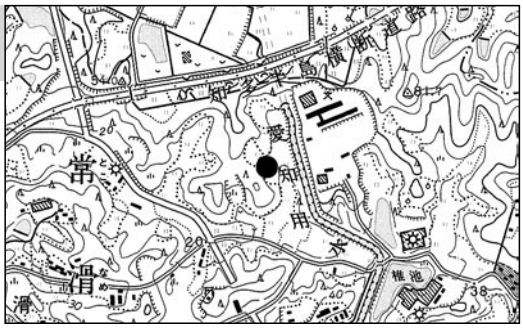
SY01土層断面



溜池の通水路

蛇廻間（じゃばさま）古窯跡

所　在　地　常滑市蛇廻間地内
（北緯34度53分51秒 東経136度51分30秒）
調 査 理 由　常滑東特定土地区画整理事業
調 査 期 間　平成16年７月
調 査 面 積　700㎡
担　当　者　宮腰健司・早野浩二



調査地点（1/2.5万「常滑」）

調査の経過　蛇廻間古窯跡は、常滑市蛇廻間地内に所在する中世常滑焼の古窯跡である。本窯跡の発掘調査は、常滑東特定土地区画整理事業に伴う事前調査として、都市基盤整備公団（現独立行政法人都市再生機構）より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成16年７月、調査面積は700㎡である。

立地と環境　蛇廻間古窯跡は、知多半島中央丘陵から西に派生する尾根に形成された小谷内の東斜面に立地する。尾根の標高は約37mである。同一尾根の北斜面には四池Ａ・Ｂ古窯、先端付近の南西斜面には夏敷古窯跡、支谷を挟んだ東尾根上には柴山古窯跡群が立地する。

調査の概要　尾根には北東斜面を中心に中世陶器が散布するが、発掘調査の結果、灰原は現地表下に埋没した尾根の斜面にその末端部分が残存するのみで、窯体やそれに付随する施設はすでに滅失したことが明らかとなった。旧来の自然地形そのものも、農地の造成、土砂の採取や流出によって大きく改変され、尾根の北東斜面のみが相対として旧地形を良好に残存させているに過ぎなかった。

灰　原　灰原は現地表下約１～２mに埋没した尾根の南東斜面において確認した。確認した灰原の層厚は約30㎝と薄く、灰原の末端部分に相当するものと考えられる。灰原は地表下の尾根の斜面上にさらに広がると想定されたが、完掘は不可能であった。

出土遺物　遺物は尾根の斜面に堆積した流出土、灰原から出土した陶器が大部分を占める。これらは常滑窯編年２型式を主体とし、12世紀後半の年代が与えられる。焼成された器種には甕、鉢、三筋壺、碗、皿、羽釜がある。（早野浩二）


調査区全景


調査区土層断面

高坂（こうさか）遺跡

所　在　地　宝飯郡御津町大字広石
（北緯34度49分48秒 東経137度18分58秒）
調 査 理 由　県道大塚国府線道路改築
調 査 期 間　平成16年10月～平成17年２月
調 査 面 積　1,700㎡
担　当　者　宮腰健司・松田　訓



調査地点（1/2.5万「小坂井」）

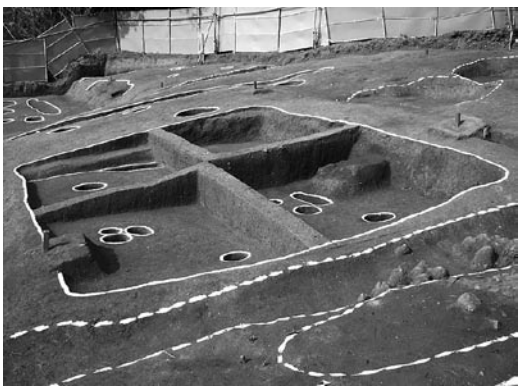
調査の経過　発掘調査は、県道大塚国府線道路改築予定地内における事前調査で、愛知県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成10年度に範囲確認を、平成11年８月から12月にかけて本調査を実施しており、今回は、平成11年度調査区のさらに北東側における道路建設予定地を、平成16年10月から翌年２月にかけて実施した。調査面積は、1700㎡である。

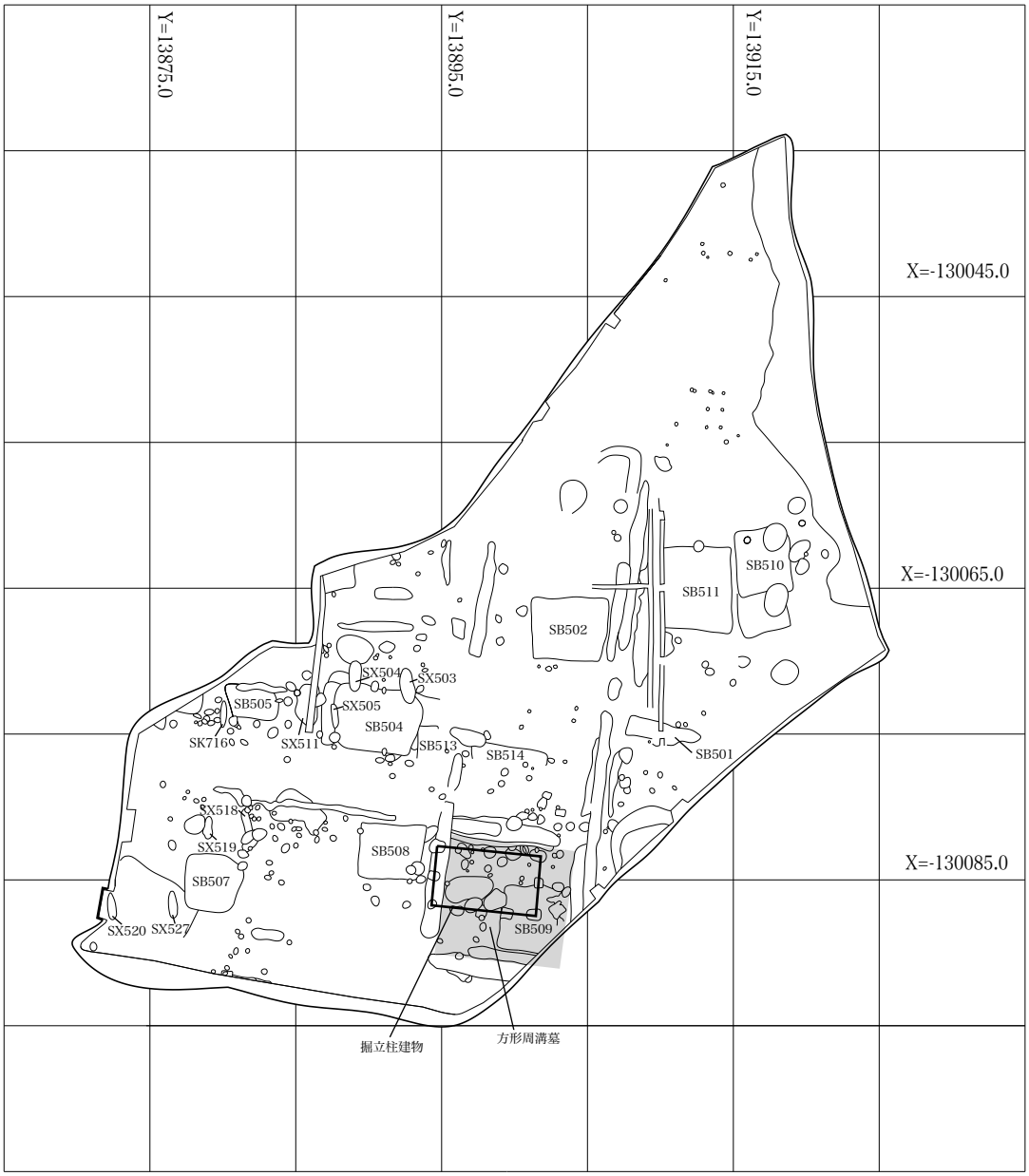
立地と環境　高坂遺跡は、ＪＲ東海道線愛知御津駅より北西約２㎞の、宝飯郡御津町大字広石地内に所在する。調査地点は、南に向かってゆるやかに下る舌状の丘陵地に立地し、標高はおよそ34m～38mを測る。調査地の北西には、古墳時代を主体とする石堂野遺跡、南西の浅い谷をはさんだ台地上には、弥生時代末から古墳時代を主体とする石堂野Ｂ遺跡、北東には、広石銅鐸出土地などが近接する。

調査の概要　調査地の旧態は畑地及び雑木林で、耕作土、表土10～30㎝を機械掘削によって除去した。これに続いて現況では、自然形成された斜面を段状に造成し、排水用の溝が掘削されていたため、盛土を除去した。この時点で、一部に遺物包含層と考えられるにぶい黄褐色シルト層を残すも、基盤層と考えられるにぶい赤褐色粘土等が大部分で露呈したため、シルト層を掘り下げつつ遺構検出作業を行った。

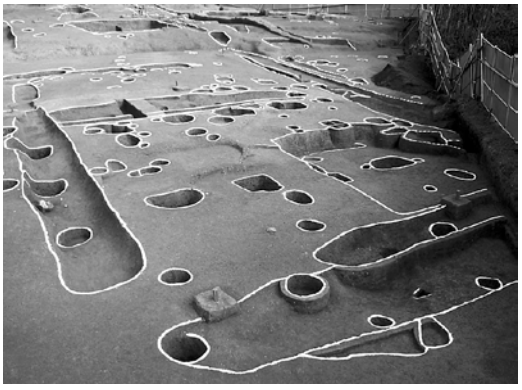
検出された遺構は、方形周溝墓１、土坑242、火葬土坑９（SX・SK）、溝2、竪穴住居15、掘立柱建物１他である。これらの遺構の時期は、方形周溝墓は欠山式と思われる壺が溝から出土し、竪穴住居は古墳時代後期～古代の遺物がわずかに含まれていたが、全体的に遺構に伴って出土するものが少なく、現在整理検討中である。　（松田　訓）


調査区全景（南西から）


竪穴住居（SB502）



主要遺構配置図



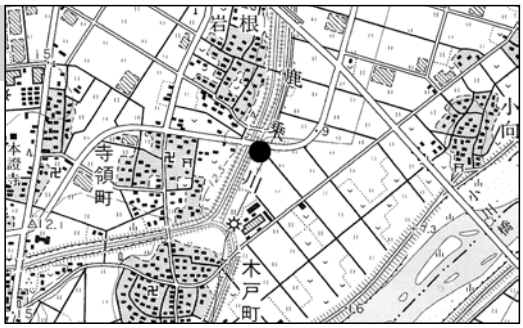
方形周溝墓・掘立柱建物



方形周溝墓西周溝内出土壺

惣作（そうさく）遺跡

所　在　地　安城市木戸町惣作
（北緯34度53分60秒 東経137度5分38秒）
調 査 理 由　鹿乗川河川改良工事
調 査 期 間　平成16年10月～平成17年３月
調 査 面 積　3,295㎡
担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴



調査地点（1/2.5万「西尾」）

調査の経過　調査は愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成16年10月から平成17年３月にかけて実施した。調査区は横断する道路などのため便宜上８調査区に区分し、北から順にＡ区～Ｈ区と呼称した。

立地と環境　惣作遺跡は安城市木戸町の鹿乗川左岸に所在する。矢作川などによって形成された自然堤防およびその後背湿地に立地しており、標高は約７ｍを測る。遺跡の西側は現鹿乗川を挟んで碧海台地が広がっており、南西方向の台地上には奈良時代に創建されたと推定される寺領廃寺跡が存在する。

調査の概要　今回の調査では、弥生時代から江戸時代までの様々な遺構や遺物が確認された。これらは弥生～古墳時代、奈良～平安時代、戦国～江戸時代の3期に大別することができる。

弥生～古墳時代　Ｅ区を中心にＤ区とＦ区にかけて展開する自然堤防上に、弥生時代中期前葉から古墳時代前期までの竪穴建物跡が約40棟確認された。特にＥ区では、竪穴建物跡がいくつも重複した状態で認められ、遺物も岩滑式から欠山式までの各段階のものが存在することから、集落が連綿と継続していたことが分かる。Ｄ区南部で検出されたSB36は弥生時代中期前葉に位置付けられる竪穴建物跡であり、その覆土から焼成剥離土器片がまとまった状態で出土した。一方、Ｃ・Ｄ区西半部では弥生時代中期の河道が確認され、川岸から弥生時代中期後半の土器が出土している。Ｃ区東部ではこの河道が埋積した後に構築された弥生時代中期後葉の方形周溝墓が1基検出された。また、Ｅ区東端部では後背湿地状の落ち込みが存在し、そこから弥生時代前期の土器片が出土した。出土遺物は遺構の密度に比べると比較的少ないが、遠賀川系土器の小片等も認められる。

奈良～平安時代　Ｃ区とＤ区で、奈良時代と推測される掘立柱建物跡が２棟確認された。建物周囲には溝が巡っていたと考えられ、この溝から8～9世紀に位置付けられる須恵器などが出土した。Ｅ区とＦ区では平行して走る溝が数条確認されている。また、Ｃ区とＤ区の西部では大規模な落ち込みがあり、9～10世紀に属する灰釉陶器や瓦類などが出土した。灰釉陶器には底部外面に墨書された碗・皿が多量に出土しており注目される。この他にＥ区東端部の後背湿地の落ち込みでは銅滓などが出土しており、この近くで銅製品の加工が行われていたことが予見される。Ｂ区からＣ区にかけてはおおよそ東西方向に走る河道が確認され、折敷などの木製品が出土した。また、Ａ区からＢ区にかけてはほぼ等間隔で平行して走る小溝群が検出されており、畑跡であったと想定される。

瓦や銅滓などが出土することから、付近に寺領廃寺に関連する作業場が存在した可能性が考えられよう。

戦国～江戸時代　この時期の遺構は河道・水路や水田跡などが確認されており、調査地点は居住域ではなく耕作域であったと考えられる。Ｂ区では水路と水田跡が、Ｃ区とＤ区では近代まで継続

する大溝が検出された。一方、F区～H区にかけてはおおよそ南北方向に流れる河道が確認され、粘土の堆積層から下駄や木胎漆器などが出土している。また、全ての調査区において、江戸時代後半に形成されたと推測される層厚50cm以上の河川堆積物が認められた。

ま と め　今回の調査により、西三河で初めて少なくとも弥生時代中期前葉まで遡る竪穴建物跡が確認されたことは特筆すべきであろう。それ以降についても多少の断絶はあってもおおよそ古墳時代前期まで連続して集落が営まれていたことは、矢作川中流域の弥生集落の動向を考える上で貴重な成果を得たといえる。（鈴木正貴）



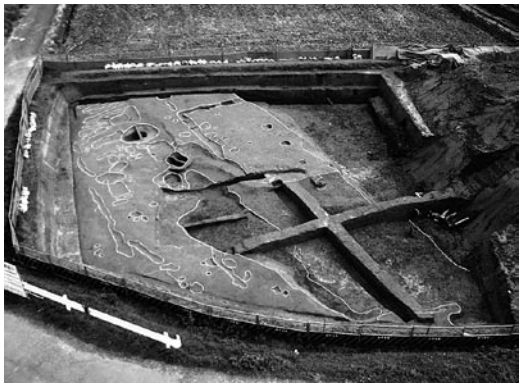
A区1面南半部　平安時代の畑跡？　北から



B区NR01木製品出土状態　西から



B区2面全体　平安時代の畑跡？と河道　北から



C区1面全体　古代の建物跡と大型土坑　西から



C区2面東半部　弥生時代中期の方形周溝墓　西から



C区土器棺墓（弥生時代中期後葉）　南から



C区3面全体　弥生時代中期の河道　南から



D区1面全体（奥の細長い調査区がE区）　西から



D区SB36焼成剥離土器片出土状態　北から



E区2面東部　東端部の落ち込み　東から



E区2面SB24　南東から



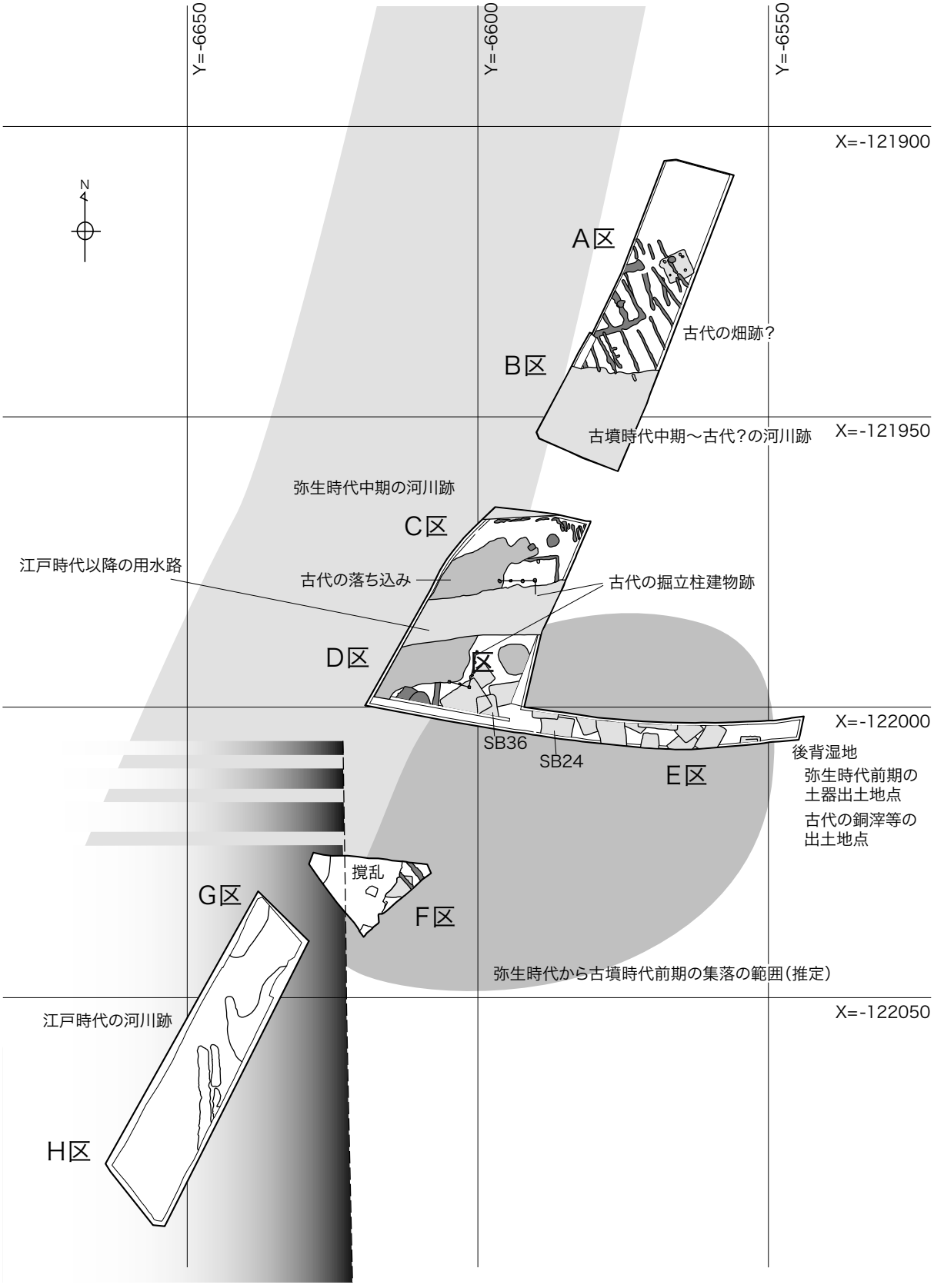
F区2面東半部　弥生時代中期の建物跡など　北から



G区弥生時代中期の河道出土土器　北東から



H区1面全体　江戸時代の河道　北から



惣作遺跡遺構図(1:1000)

御山寺（ごさんじ）遺跡範囲確認調査

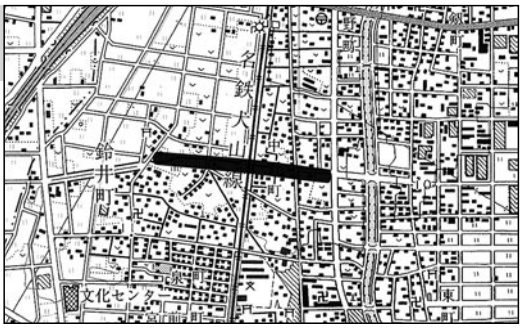
所　在　地　岩倉市中野町、鈴井町地内
（北緯35度17分18秒 東経136度52分13秒）

調 査 理 由　街路新設改良一宮春日井線建設

調 査 期 間　平成16年４月12日～22日

調 査 面 積　100㎡

担　当　者　蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「一宮・小牧」）

調査の経過　調査対象地内に16ケ所の試掘坑（テストポイント、以下T.P.と略す）を設定し、土層の断面観察・遺構検出を行った。その後、各テストポイントの遺構の深さ、遺物の出土状況などを精査し、遺跡の範囲とその性格を確認した（テストポイントの設定位置は図を参照）。

立地と環境　岩倉市の北部、五条川右岸に形成された自然堤防上に立地する。岩倉城遺跡からは北北西約1.5㎞に位置する。

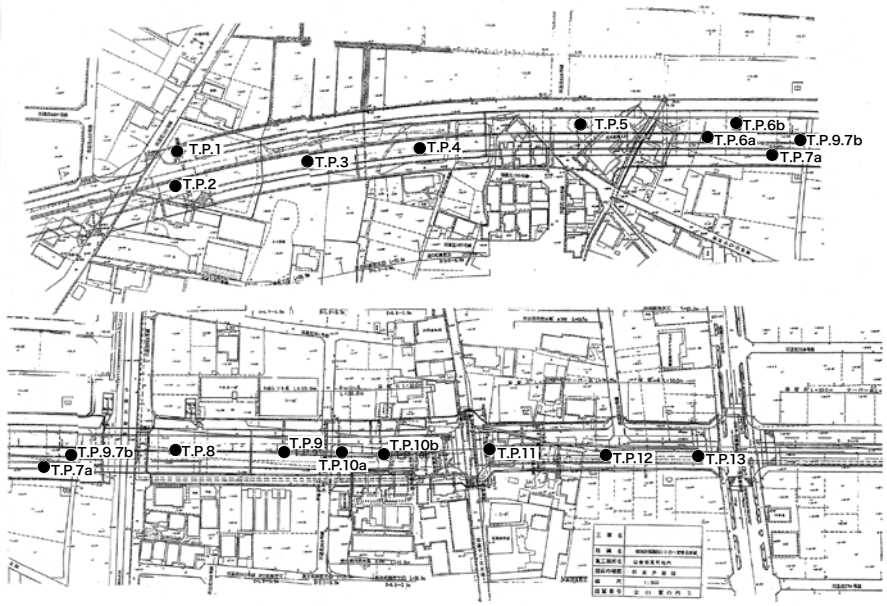
調査の概要　T.P.1とT.P.2は最も西側に位置する調査地点で、最近の掘削による堆積を除去すると古代～中世の遺構が全面にあり、地表下1.0mには厚さ20㎝程の黒色土層が検出された。下層の黒色土層からは縄文時代後期の土器が出土し（T.P.1）、その周辺の土層からは炭化物も検出された。

T.P.3～T.P.5では最近の整地・盛土層を除去した面にて水田を検出した。T.P.3とT.P.5は近世と思われる水田面から良好に残っており、T.P.3では古代以降ほぼ同じ位置に築かれた畦畔を４層確認した。

T.P.6a～T.P.7bは畑地の微高地となる部分で、T.P.6a・T.P.6b・T.P.7aでは最近の耕作土を除去すると古墳時代前期の竪穴住居や中世の溝、土坑などを検出した。しかし、T.P.6b・T.P.7aにて半分程、T.P.7bにて全面が最近の土砂採取により、遺構・遺物が消失していた。

T.P.8～T.P.13では最近の掘削による堆積を除去すると、中世以後の遺構面が認められ、古墳時代～戦国時代の遺構・遺物が濃密に認められた。特にT.P.8～T.P.10aにかけては遺構深度が100cmを越す可能性もあり、中世を中心に連綿と遺跡が営まれた状況が窺われた。T.P.10bは最近のゴミ廃棄により全面が掘削されており、遺構・遺物とも消失していた。

今回の調査対象地は、調査対象地西側中央部分のT.P.3～T.P.5の水田跡が検出される地域を挟んで、東西に古墳時代から中世、戦国時代にかけた集落がひろがる遺跡と考えられる。また、調査対象地西端のT.P.1とT.P.2付近では下層に縄文時代後期の遺構が存在するものと考えられる。（蔭山誠一）



御山寺遺跡試掘地点

かのりがわりゅういき 鹿乗川流域遺跡群範囲確認調査

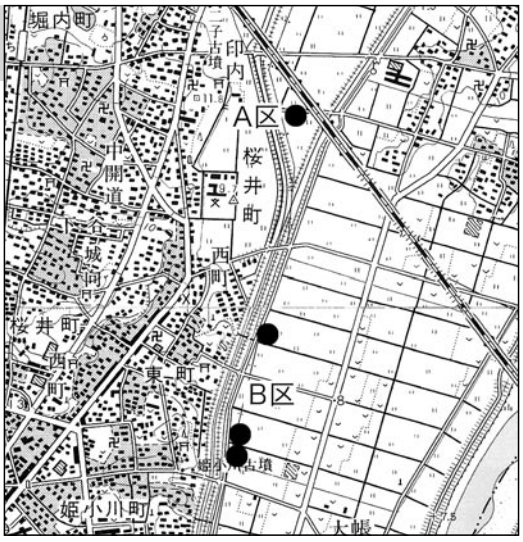
所　在　地　安城市桜井町・東町・姫小川町
（北緯34度54分54秒 東経137度5分49秒周辺）

調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調 査 期 間　平成17年２月

調 査 面 積　230㎡

担　当　者　宮腰健司・松田　訓



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

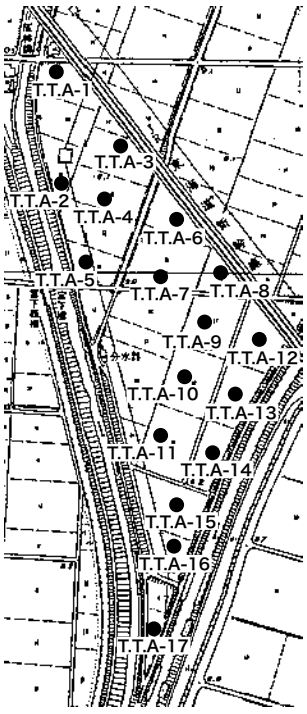
調査の経過　発掘調査は、中小河川改良事業（鹿乗川）予定地内における試掘調査で、県建設部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成17年２月に実施した。調査面積は、230㎡である。

立地と環境　鹿乗川流域遺跡群は鹿乗川に沿って展開する遺跡群で、平行して流れる矢作川が形成した自然堤防上や、西に広がる碧海台地の縁部に立地する。

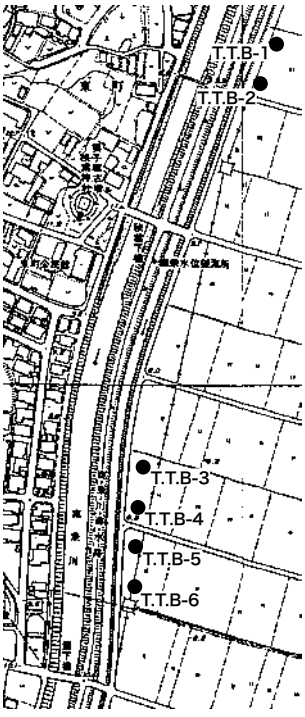
調査の概要　今回の範囲確認調査は、大きく二ヶ所に分かれて行われた。A区は西鹿乗川と鹿乗川が合流する地点の北側で宮下遺跡の東、B区は鹿乗川左岸の姫小川橋の北側にあたる。

A区では、17地点に２×５ｍの試掘トレンチを設定した。A区の基本層序は、上位より耕作土-灰白色シルトー灰黄色（白色）シルトー褐灰色シルトー灰白色シルト・砂で、灰黄色（白色）シルトー褐灰色シルトに古墳時代から古代の遺物を包含する。T.T.A-7～9、11.14～17では土坑及び溝と考えられる遺構が確認され、その中でもT.T.A-7・8では古墳時代の多くの遺物が出土している。またその間のT.T.A-10・13では遺物は見られなかったが、13では畦畔と思われるセクションを確認している。さらに北側のT.T.A-1～6・12では遺構は検出されなかったが、古墳時代～平安時代、江戸時代の遺物が出土している。

B区では、６地点に２×５ｍの試掘トレンチを設定した。B区の基本層序は、上位より耕作土-灰オリーブ色シルトー灰白色（黄色）シルト、灰色（灰黄色）粘質土ー灰白色シルト・砂で、灰白色（黄色）シルト、灰色（灰黄色）粘質土に古墳時代の遺物を包含する。T.T.B-2・6では土坑または溝の遺構を確認した。またT.T.B-1では南に落ちる自然流路状の堆積が確認されている。　（宮腰健司）



A区（1：6000）



B区（1：6000）